

911.3
ハ
上

色蕉袖草紙上

浪速 花屋葺音淵校

延寶九年

次韻

晋伯倫傳酒德頌樂天繼以酒功
讚青醉之續信德七百五十韻

二百五十句

挨拶とあるはこれ花とと
まうとあるはこれのまゝもある

管の足雖短もく残さへて 桃青

這句以 莊子 可見矣 其角

彈臂の力たのふぬるさてふ 才磨

あふく凡のねるなり 新

着よ来て 軒をかき 角

灯ふうりと 青

粟^{アワヒ}の粒さくく素子^{ソコ}の守^カ
 侘^ワ雀^セ昼^{ハシ}眉^{マユ}の客^{カキ}ふよびつらん 青
 恙^{ヤス}悲^ヒ舟^{フネ}の閑^{シヅカ}つれくつと 角
 風^{フウ}のち食^{クハ}ふ朝^{アサ}の下^{シタ}成^{ナリ}るす 九
 先^{マタ}祖^ソ成^{ナリ}え知る雲^{クモ}の夜^ヨ語^{カタリ} 水
 灯^{トウ}火^カ成^{ナリ}るくく山^{ヤマ}火^カを世^ヨなふこ 角
 古^コきやうぐよ鬘^{カツラ}外^{ソト}うけ 青
 武^ブ士^シのぬき成^{ナリ}るあふりか 水
 女^メいなくく子^コさといふ 丸
 掬^{スグ}あゝく鏡^{カガミ}のふつゝる眼^メ 青
 らの猫^{ネコ}の力^{チカラ}成^{ナリ}背^セるる 角
 らのよ藤^{フジ}て且^{ナニ}易^{ヨシ}列^{リツ}易^{ヨシ}忘^{ワシ} 丸
 乳^{ウチ}なゝの聲^{コエ}のうつる菖^{ショウ}蒲^ホ菜^{サイ} 水

粟と称さく黍子の守力

ツワヒ
佗崔昼眉ホシロ以客ふよびつらん 青

恙非舟の閑ひまにけくしと角

困ると食ふ物の下積むす 丸

先祖父兄の夜語 水

灯火はくく山を照らす

古きあづぶよ 髪カツラ 外ソト へ 青

武士のぬき物

女
い
な
く
子
さ
と
い
い
か

撮あゝ
競のふつ
てなる眼
書

人の猫の力成背る

中略又據て且易訓易忘

乳の聲のうづき

春秋城花と倉とと暇ふれ角
 白奥をうとすより餅眷れ宴 青
 寛平のおふん仇指合あり 水
 清土松灯城柳て睡る 丸
 はーとるりける女房れ声文て 青
 血指の糸とと扱やあらん 角
 ぶれ糸むとるんとてなふと 丸
 獄囚正城あふりーい 水
 天帝と目安城きてまてのけ 角
 柱成掘て星櫓を 拖 青
 雨の擔ふ風のころすれ冷うに 水
 秋と對して雨、葎堂の記 丸
 白糸仁み紫村とて還し聲 青
 漢の火新銅城對る 角

白奥をくすくすり 餅春^{ツキ}仕宴 書

寛平のおふ人悦詣合あり

清士拈灯城柳て睡る

はしとるなりき 女房は声立て 妻

血摺の糸と扱やあらん

あはれまゝむらゐるそなふと

獄囚正はあろハ
ミ

天帝又目安臥也て冥之也

拉城掘了星種在抽

雨の捲き風のうすけ冷かに

秋と對して不常堂の記

白穀仁 弘治村 日 送 聲

漢の火銃銅戟射

師^シ奥^リハ諫^リめ輓^リハ拍^リ戔^リ割^リる 丸
安^ニ房^リの岸^リ崎^リハ流^リ人^リ才^リと泣^リ 水
向^ニ後^リとて行^リ徃^リ古^リの晚^リ鐘^リと 角
拍^リ起^リハ初^リ音^リの魂^リちの魂^リ 青
忘^リ人の徒^リハ似^リとるう着^リ掛^リ 水
雨^リ城^リくねるう反^リ風^リハ書^リ 丸
夕^リ暮^リハ息^リハ烟^リ城^リとく思^リひ 青
民^リをあつて後^リ城^リせむむる 角
矢^リの本^リ愁^リる草^リの野^リハ昧^リく 丸
又^リあかる海^リ邊^リの古^リ屋^リ 水
力^リハ人^リ言^リ屋^リとく思^リれと 角
表^リれと又^リ城^リ躍^リる板^リ終^リ 青
徒^リとく小^リ社^リハ何^リと拍^リとぬ 水
朔^リ々^リ拍^リととぬおとろく 丸

花^リハ照^リる太^リ神^リ宮^リの奇^リ拍^リと 青
幣^リハ果^リつる託^リの 角

次韻

雁^リハ雪^リとる
みみまはとる

春^リ沈^リハと編^リ頂^リとるあり 其^リ角
今^リ年^リハ秋^リ系^リ城^リ森^リとて 丸
月^リ城^リ連^リハ坐^リ鳥^リ帽^リとるあり 揚^リ水
笛^リハ法^リ利^リ城^リおとるあり 桃^リ青
おぼこさ川^リ流^リ草^リの系^リ城^リとる 丸
早^リ山^リ路^リハ鈴^リとるせける 角
夕^リあゆる岸^リとるありとるあり 青
夜^リ盜^リ招^リ風^リの音^リ城^リ合^リとる 水
雨^リの周^リとるめて敵^リとるせける 角

舞臺は宋の唐はわ戸 丸
 といやうにうい氣う世驚こ 水
 木とつゝさき夢のふさしく 青
 移さめ侘て雪の炉小根源温 丸
 あゝゝゝいつく帳の紙 角
 女の氣うつるとこゝろで終すこゝ 青
 若氣きあてやふれ潤る 水
 ストント茶入落してい令も 角
 とうあえすねふはる 丸
 秋の末つゝ暖脈が成通う 水
 とうりて
 藩の院の市後成と 青
 鬼何ふ舎人の花よかろめ 丸
 子世の番城寅は歌て 角
 スッホウ
 渾沌翠よきて氣ふ好 青

朝咲あゝゝゝる麻くの山水
 雪のつれ女房は帳のけろろ 角
 吉原君はぬとさういさなり 丸
 棒軍勇やつふせと止つて 水
 はきうすの陰より棒は弦引 青
 富の屋敷徳明王のちりま 丸
 摩訶なま 苦奈園よ生ル 角
 愛ヲ捨子ヲ捨毗盧遮阿毗羅叫 青
 嵐とるめて風をやふふく 水
 夜の食乏しく森さるる以い 角
 蛸の舌とて耳は後う 丸
 月の秋うらとさとの且夕て 水
 赤ううとむ妹の 青
 ものりて鏡は秋のけり 丸

鈴と酒りの興をては角
 小波うね本松と常さうとて青
 駒鹿の神祇齋モイミ——系水
 煉掃之礼ニ用於鯨之脯ホシ角
 やといの翁齒采刈と入丸
 風いとい牛とへ氷とさうと水
 荒居よるの枯屋とく青
 おそろしく白骨のく付てある丸
 曾呂利新活城漢と扱角
 禪小傍豆腐と月の詩を刻キザ青
 雷スリハチと鳴て色並とて風水
 花の今朝キと羊城並切と角
 橋よわとて城はととて水丸
 不常ムスコとい息と去年の雪と扱水

を試みてさく花とて人青
 困のからりの技と茶茶と丸
 山と城とをたいて矢とて角
 木のいふ人へ花とて水青
 本槿のやふとて本城の唇水
 細殿と鬼灯の燈籠とて角
 踊り衣の振ふたりとて丸
 酒の月市伽坊とての茶と水
 茶素流とてやと奥の泉と青
 心胃の茶とてわが城とて丸
 日しとてたえて蛇とて化角
 葉城とて根の底とて車とて青
 天火とて園の金掘とて水
 堀江の城とて茶とて白浪と角

青海苔^{アサギ}としい餅^{モチ}とと弾丸^{弾丸}
 花^{ハナ}の言^{コト}を芝^シと旅泊^{リョハク}成^{ナリ}賞^{サウ}る水^水
 有^アる秋^{アキ}とく^クと^ト東金^{トウキン}の傍^{ナリ}青^青
 淋^シる^シ成^{ナリ}為^{ナリ}ま^マる^ル病^{ヤミ}と互^タ依^イ丸^丸
 ヲ^オ只^シ重^シく^ク貧^ヒ居^イひ^ヒる^ル角^角
 枕^{マクラ}の本^ホ小^コ婢^ヒな^ナく^クは^ハに^ニ床^{トコ}て^テ青^青
 枕^{マクラ}の清^{スガ}水^{ミヅ}と^ト夢^{ユメ}あ^アく^クい^イ水^水
 夏^{ナツ}の身^ミ成^{ナリ}何^{ナニ}と^ト銀^{ギン}ふ^フる^ルよ^ヨて^テ角^角
 我^ワが^ガ信^{シン}に^ニよ^ヨと^トさ^サる^ル丸^丸
 生^{ナマ}け^ケる^ル成^{ナリ}泥^{ドロ}折^ヤれて^レは^ハ金^{キン}を^ヲ量^{リヤウ}水^水
 沈^{シヅ}河^カ海^{カイ}と^ト雨^{アメ}の火^ヒ青^{アヲ}し^シ青^青
 州^{シュウ}の奥^{ウチ}下^ゲ書^{カキ}る^ル糸^{イト}に^ニ書^{カキ}る^ル丸^丸
 狄^{テイク}の里^{サト}れ^レ足^{タラシ}あ^アく^クひ^ヒ鍋^{ナベ}角^角
 配^{タイ}所^{ショ}人^{ジン}声^{セイ}の^ノ小^コ糸^{イト}市^{イチ}成^{ナリ}下^ゲを^ヲ青^青

あ^アる^ル光^{ミツ}の^ノ菌^{キン}辛^{シン}螺^ロと^ト花^{ハナ}と^ト水^{ミヅ}
 心^{ココロ}地^チや^ヤむ^ム鯛^{タイ}と^ト針^{ハリ}と^ト生^{ナマ}心^{シン}糸^{イト}角^角
 中^{ナカ}れ^レと^ト尾^ビ多^タ花^{ハナ}と^ト出^デる^ル心^{シン}丸^丸
 麦^{マク}望^{サイ}れ^レ豊^{トヨ}の^ノ光^{ミツ}成^{ナリ}ま^マる^ル水^水
 勅^{チク}使^シ芋^{イモ}原^{ハラ}の^ノ朝^{アサ}長^{チヤウ}蕪^ワ坊^フ青^青
 秋^{アキ}成^{ナリ}啼^{ナリ}鳥^{トリ}の^ノ身^ミ成^{ナリ}正^{セイ}と^トし^シ丸^丸
 夏^{ナツ}や^ヤと^トの^ノ人^{ジン}の^ノ時^{トキ}鳥^{トリ}と^トに^ニ角^角
 津^ツの^ノふ^フれ^レ生^{ナマ}田^{デン}の^ノ表^{ウラ}の^ノ初^{ハツ}夜^ヤ炭^{タン}
 道^{ミチ}と^トよ^ヨた^タけ^ケと^トを^ヲ食^シ接^{セツ}す^ス水^水
 霜^{シロ}下^ゲり^リて^テと^トり^リ里^{サト}の^ノ粥^{シヤク}配^{タイ}り^リ角^角
 寺^{テラ}の^ノ納^{ナツ}豆^{マメ}の^ノ声^{セイ}に^ニと^トは^ハ丸^丸
 よ^ヨれ^レの^ノ水^{ミヅ}と^ト接^{セツ}花^{ハナ}と^トの^ノ壳^{カキ}と^ト産^{サン}水^水
 固^コ炭^{タン}あ^アり^リて^テ小^コ井^イと^トし^シ青^青
 勝^{カチ}と^トし^シと^ト接^{セツ}の^ノ清^{スガ}水^{ミヅ}と^トし^シ角^角

辰よりかろれよ牛車一なり 丸
升のふくみ人待下なる藤花にて 水
舟を停みてよ暇をさるる 青
洞のふくみ人待下なる藤花にて 丸
千しをみくさるるあつた理本角
義傳ひてす藤花をさるる 青
如泉法昨よりま力あり 氷

次韻

世よりかろれよ牛車一なり 丸
泳たかく力ふあつた理本角
あつたふくみ人待下なる藤花にて 丸
新といひをたり海風潮く 其角
雲れ客実の客とふくまふ 水
藤花の舟に歌を後より 丸

方

薬やりとて流れて風流林とふ 角
携ふ藤花をさるるあつた理本角
藤花の舟に歌を後より 丸
忘れたる舟とふくまふ 水
蒼文て携の板戸をさるるあつた理本角
指より舟とふくまふ 水
髪結の住り人待下なる藤花にて 水
草花の舟に歌を後より 丸
胃力土を携の舟とふくまふ 角
瘦たる馬の舟とふくまふ 青
内より舟とふくまふ 青
米より舟とふくまふ 水
佐より舟とふくまふ 青
佐より舟とふくまふ 青
佐より舟とふくまふ 青

筆耕寸青蕉の牛ふ花付て水
燕菜の流くむら 丸
后宮れ最入車やうふる 角
祓たーや上の伊若丸の極 青
此中がつたふて水の音聴かす 丸
挑灯切ておのうけろい 水
風前の角内と身狀情うふ 青
入るのふふと狼より 角
雷の斧すくーとまゝに 水
玄又玄ー蛇頭の圓 丸
俗より入康の海の底ある 角
潮の目れ東北地赤螺 青
付成是て蛤の殻てまゝ 丸
いそぐくと雨義なる 水

力成葺夕草の葉の月好 青
栗刈 敷て團子丁と 角
カ 魚の卵の卵うへの殻いふと 水
水汲起て帚 尋る 丸
登うろ人い志のひてある 角
槌と子またくまはろー 青
古家の後草園よとる 丸
いたらの丸倉風の荒ふる 水
麻の葉よ生る小袖と打て 青
かと校さけふる生の浦抽子 角
死たれくて清に隣城位ふ 水
明てと味ごごふけ液と 丸
豆麦の食たく種より 角
人死を待て生ふといふ 青

石、曰花のめてたく咲に多 丸
 木玉に、なで風吹舞柳 水
 三 飛雨、意の流に霞、空、青
 驢馬の進、と、舛、キ、角
 大根の、意、誠の、実れ、と、水
 雲の、く、鞋、と、文、付、て、や、丸
 表、や、火、桶、の、謳、の、要、と、角
 有、徳、と、床、ふ、ぬ、と、人、割、と、青
 も、や、く、と、庭、入、と、く、と、水
 通、は、は、背、の、後、で、た、と、水
 迷、ひ、と、恨、と、糸、の、目、け、角
 接、を、お、と、助、後、と、と、角
 今、春、力、に、村、風、と、や、三、味、線、と、水
 や、と、と、や、と、と、と、と、と、丸

秋の、お、服、切、料、成、と、と、角
 佐、持、と、と、と、と、と、青
 面、白、く、壺、曲、成、和、ひ、と、丸
 海、老、ち、と、と、と、と、と、水
 意、崎、の、松、と、娘、の、と、と、青
 契、世、と、と、と、と、と、角
 ト、同、と、と、と、と、と、水
 蛇、の、氣、と、と、と、と、と、丸
 毎、原、死、皇、居、と、と、と、と、角
 清、水、の、司、麦、と、と、青
 い、つ、と、と、と、と、と、丸
 志、尼、と、と、と、と、と、水
 衣、録、と、と、と、と、と、青
 外、里、と、と、と、と、と、角

松茸は道一ゆくの松茸水
桑の指は有暇のいづ丸
+ 佐寔は蚕の青はあふる角
足袋とを宿に風おとす青
扇折る女の夏は捨てられて丸
まゝに江戸は忘れたる水
むしとを歩はるは懐てやう青
熱ある桑のふもとを角
おくに來て上るは聲細水
法眼うち一武老待てや丸
宮造る意の道の名をく角
廣斗は冠の櫻はわたり青
綱なる桑は屋のうらぬれ丸
故園今とくは蘭腔——水

九

風の月熱の清雪は残る青
黄なる小僧の怪しき角
山路をいらるはとを忘れ水
篠の枝折は猿はひる丸
岩の挿と深くをの青
氣とくをれ——人の抜る角
血は端て風を力に折る水
右背はとけて世に丸
わかれて花は枝をさむる角
狐は酔て醺醺は入る青

天和三年

鹿栗

酒債尋常往處有
人生七十古來稀

詩のそんと年が食う酒債 其角

冬湖日暮て駕馬 鯉芭蕉

干^き純と妻と雲城のうら

己^こ依人の鬼城に 心角

力に社かゝるに睡る膝に 角

晴のね しる 衣保に し 蕉

恥^ちあふぬ悟城の し 蕉

晴雨 山崎 傘城 寒 角

無井のこて し 蕉

持場の雲よ 蕉

一の姫屋の 蕉

軒 蕉

晴 蕉

う 蕉

十

水 蕉

色 蕉

腐 蕉

輓 蕉

舞 蕉

た 蕉

初 蕉

黒 蕉

枯 蕉

魔 蕉

鐵 蕉

市 蕉

山 蕉

う 蕉

皆い花を負重しきい人依蕉
芭蕉あうれ蝶丁又よ角
腐もろろ依蕉もろろ又よ蕉
鰐ホキくこいて藤公叔社ぬ月角
舞入の近はくやうにわの角
わういやんと葛うろろふ蕉
潮りそまきハ持小紫角
黒鯛くろくおと女乳蕉
枯藤家栄蝶の角松をふん角
魔サと侵しに荒海の崎蕉
鐵の弓矢猛と世又出よ角
帛懷ま雄ねあうつ蕉
山空く四睡の床吹ぬ角
うはと火清て摘の灯蕉

下司后朝紙張と力と角
西此紙張と包むあやしく
表れふふ紙張の吹調人蕉
みちのくけ美あしぬる日角
武士の鎧の丸麻よしくん蕉
八声の弱け雪紙張は角
詩あそ人と花紙食う酒債れ
美湖日くれて駕典吟蕉
天和三年

虚栗

憂^ふ方^か知^り酒^{しゅ}聖^{せい}
貧^ひ始^は覺^{かく}錢^{せん}神^{しん}

芭蕉

花ようじそ紙我酒なく食運
眠とそと陽^{ひだり}の^の疲^{つか}一品
鶴啼て青^{あお}紙^し夏^{なつ}紙^し陽^{ひだり}人^{ひと}嵐雪

土

童子磔とち折る唐梅其角
力紙湯と江の夢と芦刈て嵐蘭
浪のそとそなたと物け華
琵琶洗ふ雨と朝の雨は晶
相と烏帽子紙ふろ紙衣蕉
浪人の意とる紙あうち紙雪
やぶれ一板と入りひとふ紙蘭
あそとと日と宗有紙抱ひと角
藤へ退之と肝^{きん}魂^{こん}と奪晶
雷鳥のそとと角紙鳴ると蕉
けとる海と轆^{りく}原^{はら}と雪
碩^{しやく}珠^{しゆ}の鏡紙拾と鉢代と晶
羽織と角紙張と風流雄角
仇と紙と据紙とと竹の力蘭

童子礫とち折る唐梅其角
力成過を江の夢と声列て 嵐蘭
浪のそくもまたたふと釣うけ 華
琵琶洗ふ雨より朝の明雨は 晶
相は烏帽子成ふより紙衣蕉
浪人の意を成るよりおひる 雪
やぶれ一板入るひをふれ 蘭
霞とくより宗有成相ひる 角
藤へ退之う肝魂を奪 晶
雷鳥のそく喜は角成つる 蕉
けつる海より 鯉 原る 雪
傾城の後成於けけ代り 晶
羽織は角成限を風流雄角
仇くせ 権成出て叶の力 蘭

破蕉保て詩の上ヲツク雪
朝鮮は西北と銘る途より蕉
はくちぬ火の松浦行権晶
めつゝるるわけをくゝの藍庇雪
蜜ハ松の玉枝のむ蘭
掃入ぬ朝ハ六十の荆ノて角
所は胡座く世夷之蕉
人の怪異摠長の育の獣子晶
ね田首なき雪の暖雪
こゝろや陣中に似せ軒く蘭
山登は飢て饑飢貪る角
盗と井け力は伯夷の足は山蕉
とくとい武士の憤^{イキトヲリ}州角
見ろく^ウに強き城やくや紫抱蘭
土

笑ひさ人やお帰る鬼晶
暁の森は父母はまほされて雪
法ひは愛んあふはるり蕉
それよ栖廬山の列とねたん角
柳はともひて瀑布は酒呑蘭

草の戸は我の夢う人ほるうれ 其角
葬は我のうゝうをのこりれ

深川菴

芭蕉時分して盟は雨松す我
もつゝ雨のこひをさそりて

此よりふもさるに系祇の夢うれ

天和四年 貞享改元

幾家よんくさぬ松の松うり

阿茶院も花は来小うきに袖

二聖人の夢よ

月夜のこれやふきのまき
なときすふ月ハ折れおさる

破屋はとらいつるを風の声

そらうきこれや

朧きくひんふ風のまむお

秋十とせふつては屋をさす故に

雨あつて山をれをにくるなり

音くられ雨土をぬりおれしる

天上

左の木の権にふくみ倉きく

第土川をさるなりおれまの

泣きう倉もの捨てやりて

猿をう人抱みは秋の風いう

杜牧う早行の秋を小秋の

中山はいつて忽ち

馬は森で秋を月を茶の烟

外宮市焼亦くたえて

みくしもさき時のは風を

志むきつて

二十日月がくせの折城を

西行谷

羊ありふ女ありあは秋を人

ちりう旧里小志をさる

みろや路をさるなり

高麻ち座上の折城を

千里もいつて人れ

よも仏様といふれて寺の家
をすぬれたるをきくて

傍幕いく死つるけりの松

骨枕ある地に一敷きうて

碓うつてつれはせよ切つ葉

西上人のまの席の何と奥の

院より三はうをふとまじし

の清水を今もといふとある

雲とくしつらみふとまじし

後醍醐帝御陵

御廟年を記して志のふけと志のま

不破

秋の口平と敷も富も不破の国

冬の日

ふき入るま達の雨はふとふけ衣い

へまじしところの尻はもりなり院に

まじしなる人我まへまねまじる者

村にむねまのまじいふまじしと成

このふとまじいふて

ねむ風のふけ竹舟ふけなるが

芭蕉

たそやとまじしるまの山東花 野水

有明のまじし酒危つらうせて 荷分

かゝらのまじしとまじしありる 重五

朝鮮のまじしとまじし句ひるま 杜國

目のまじしとまじしまじし 正平

我菴のまじしとまじしとまじし 水

髪とまじしとまじしとまじし 蕉

いはりのつりしと乳松青の控 五
さえぬ幸塔彼女にそくと泣 兮
乾法のいづつきをく火を焼て 焦
ほるゝい多またえゝ虚家 四
田中あるこやんが柳あるころ 兮
芳よふぬ或人のちんもり 水
たそふれは様は泳むる力細し 四
隣さうゝよ町よりある 五
二の尾は近傍の花のほろむく 水
襟はむろろふとろろ鼻うむ 焦
系りおよと庵をく教おろろろ 五
いよそ恨のえとをかつゝあ 兮
ぬを人の記念の松れ吹をれて 焦
志をりゝ宗紙の名を付ゝ水 四

さぬきてを理りも濡るお雨 兮
冬うれふてひとり庵 芭 水
あゝしと碑けゝ人の骨 四
鳥絨はあはすの國の古 五
あられこの龜もどけ 乾 云 水
秋あ一斗もろつとをぬそ 焦
日東の李白う坊より力とえて 五
巾よ木槿をととむ琵琶抄 兮
牛の泣とぬゝぬそれくききに 蕉
箕は鯉の奥ひゝゝゝ 文 四
うろいのりめ方の星孕むゝ 兮
きよゝい妹の眉うそにゆけ 水
後ひとく居る湯に志女の死 四
廊下の藤のうけつゝゝゝ 五

冬の日

ねもへる壮年

いすところもと振りを

初雪はあつても積もて帰る 野水

霜よりさるる薜の食 杜國

野を案ずてたつめる蝶の羽を以て 芭蕉

うつゝぬるれと車引り 村分

磨り力袖は弱教と唱へる 重五

枕花と手折貞徳の富 正平

雨にゆる浅香の田原はるゑて 國

奥のささるれと只あはれまゐく 水

床ふけて寝まひいとこある男 子

縁さぬたけの恨のころり 蕉

口ととと痛とちりるかな 水

内月いかとさよ首送る 五

小こきに孟とせし川風は 蕉

力いほるれ牡丹盗人 國

縄あまのかまひやれ登る 五

ろりくしとのと地蔵切る町 分

ろり花のせと毛嫁のいりく 國

売いりくのまそとハハ 水

梅箱は係とさる福はのま 分

うらいと起る紙燭と 蕉

篠ふりく梢の掃の葉とい 水

三味線うしん不破のせ 人 五

なとさるる炭焼てやる 蕉

紅とえくのとさてし 七十 別

奉加りて市堂は黄金の 五

いりくの傘れ下 蕉 分

うつゝぬるれと車引り
 磨り力袖は弱穀と云ふ
 枕花と手折貞徳の富
 雨にゆる浅香の田螺
 奥のささる記と只あ
 床ふけて候まゐいと
 縁さぬたけの恨のこ
 りとととととととと
 内月のかととととと
 五

小三太に盃さへせしハ瓶ハ
 力ハまうれ牡丹盗人 四
 縄あまのかきしやれ登るて 五
 ちのくしものち花切町 分
 ちのちのちのちのちのち 四
 櫛箱ハ係さるる紐ハのち 分
 うちを起し紙燭さしと 蕉
 藤ふくく梢ハ掃の帚さし 水
 三味線さしん不破のせし人 五
 ちさうさく英徳てさるる基成 蕉
 紐とさくしのさてし七十 別
 奉加りた所堂ハ黄金ちさし 五
 いちのちのちのちのちのち 分

蓮池よ雪のふりあふよふ言 四
宮よふけうゝ病やふけふ 水
力ふたてる唐蒲の髪集れて 水
忘ちぬ砥涿涑とやう 蕉
秋蟬の虚^{カラ}よ声きくふつこい 水
藤の実はたふ糸ほろろ 五
後より硯ひくきふに 蕉
いより典侍の房の内侍も 四
三ヶの花鸚鵡尾ふりのも 五
あつこいといひ 越の搦括外 兮
冬の日
秋をいふ事
さうにふ
ほみふてふり 病にふく
杜園

こほりふりく水のいれま 重五
齒乃木の葉は初霜人の衣に負て 野水
水の市門はねーあけの春 芭蕉
馬糞ふりふきに風のきうん 荷兮
茶の湯者おーい 野の痛葉 正平
くらなけふ物いぬ ちつて 五
蛇をうそいふな けふ 四
あかしのとふ力を撰くれす 蕉
蒼蒼と一青ー 溪^{ミナ}賀^カ樂^{ラク}の坊 水
胡乃夜双六うらの猿寐して 四
紅花買ふ屋又時鳥さく 兮
志のふりふきとて 蛇^{ヘビ}松^{マツ} 水
今婦の老よりふふん 兮
はるきよては流の水にふれり 兮

佛食ふたる奥解とたり 蕉
 縣アサタふる花見は廊と作られて 芭
 五形董の島 六 反 芭
 うれしきに勝る雲雀ちりしと 蕉
 まるの馬の眠と花あり 水
 おうとよや矢矧の橋のそとに 國
 花屋の松とよとてまうぬ 兮
 於しよは柴刈きふのひつゝ 水
 晦日ミツカはとむく刀賣年 五
 雪の相呉の國はさめつじに 兮
 蝶よ高尾の片袖はさく 蕉
 めく人と花と花は香はさん 五
 芥子のひとくよ名はこほに 禪 國
 三ヶ月のいり晴く鏡れと 蕉
 太

秋湖にけふ琴うつれ 者 水
 烹ホウふとゆりて敷フセと放る 國
 声ふに念佛救とるつる 兮
 かけろとま行燈けしに 芭
 れといふのひも夜の帯に 五
 こくれ花たまひまはけに 兮
 そのをれ日ぬ我もわれ 蕉

冬の日

かまこつふに火焼室を
 とけしれと

重五

炭賣のおのりほふことまうぬ
 ひとの花いと鏡磨きむ 蕉
 花蘇馬骨の索とまうつゝ 杜 野
 鶴とる花の力うけうたり 水

風吹ぬ秋の日籠る雨ふき日
芭蕉
萩織るかこと市に振する
羽衣
かみ川や胡麻ふ代あや道
いとしの聲かみうの泣
五
たりと布揃うとぬるをれて
水
うさかい丹+紙裁る三平
三平
拾うれてくぬるをぬれをぬれ
五
火おぬ火雄かき人とえん
蕉
門ちの暮よ紙まわして寐る
五
血刀うくと力のうときに
分
雪あつて本郷の陸七つきく
圃
冬やうの納豆なぐくあぐ
水
それは泣揺の撫ととにける
蕉
傍るものいとに款冬を吞
五
五

白燕濁らぬ水は羽あひひ
分
宣言かーこく^{カニサレ}叙と禱る五
五
八十年か三ツる童母もちて
水
なうたちとむる七夕のつる圃
圃
西南は桂のうれのつむむと
竺
蘭のあやふトあう青蕉
蕉
所の家よ買ふる女とてう
五
狗瓶よ栗狐はく人日の書
分
とやうきとぬるこかきふ方に
圃
清くも白る舟雲の文水
水
寅の日れ且と船旅の疾起
蕉
そかうかいふ南京の地^{ツチ}茶
茶
いぐれして陸ともきぬ人^{ツチ}像
分
涙よこころの清き舟の根
五

鵜をふらつてつぎはかきり 水
竹衣の下山 篠く入るこゝろ
水の方かくし 簾おやうて 葉
露らまぬ 夏衣着るや 雨 田
冬の日

田家眺望

荷々

雪月や鶴のイ^ツく^ツな^ツひ^ツを
冬の朝日のほろけりりり 芭蕉
かき山家の体と木は葉うつ 重五
おれする牛の境こほまじ 杜鰐
音もなき具足ふ力のんじ 羽笠
酌とる童蘭切りよいて 野水
秋のころ旅の所連歌いかに 蕉
漸く晴きて富士見ゆる寺 兮

手

寂^シとして椿の花の落る音 田
葉よ系ゆふとそむ風の香 五
雛子追は鳥帽子の女五十三 水
庭よ木曾化るとひの落衣 笠
おけふ^ふに山摘は梅又散 兮
麻^マうとつみ^つの集あむ 蕉
ねを迫く獨樂庵と世は終て 五
我れ出よ^ハハ^ハか^ハは^ハる^ハなり 田
たひ衣笛は落る^ハか^ハら^ハ拂ひ 笠
龜興ゆふに木乳の山のひ 水
骨^ハは^ハと^ハ坐^ハは^ハ酒を^ハあ^ハつ^ハ 蕉
乞食の義城世ふ^ハあ^ハの^ハめ^ハ 兮
泥のう^ハつ^ハは^ハな^ハ引^ハ籠^ハを^ハ拾^ハひて 田
所幸よ進む水のみ^ハら^ハなり 五

冬の日

羽生

いづれふと雑面牛ひく我

指火ふあふろくろくのね 荷分

とくは外下忌に髪をちやせして 重五

捨置は宮沢やつとあそぶ 杜國

張は喰ふん力ハくろ 芭蕉

いづろよ搦ぬとん岐阜山 野水

熱田三歌仙

あつこふなうろくひんをゆきの
あつこふなうろくひんをゆきの

海られて鴨の声はのふ白し

芭蕉

串よ鯨をあふる 觴 桐葉

二百年我は山よ谷とくろて 東藤

撫の種さく秋は来より 工山

入る月よ鷄いかりの鳴けそる空 葉

駕ふき國のあふるは 蕉

降雨の老るる母の涙うと山
 一ツ人嘆く葎菜の窓 藤
 基の工更二日とらな目とめて 蕉
 周より帰ると狐あふく 葉
 霊芝はるる原とるる書が 藤
 美表元とるるねの入り口 山
 笠あて衣の破れ綴り 葉
 秋の鳥の人食より 蕉
 ねとひの野ふれ溪が 山
 骨の糸より就成虫 藤
 花墨とるるの扉と押ひ 葉
 笑人の歌おひうけ 山
 順夷の尊おふれ様と 蕉
 生海嵐子とふも袖 藤

子の日

木の宵より西小所堂の 山
 藪より葛屋の十はう 蕉
 はつしと蛇塚はく 藤
 糸より名より痛の呪 葉
 不二の根と笠あて 蕉
 藤より雀のひとみ 山
 ねくれは後成志の 葉
 衣うはく小性萩の 藤
 力細く肘斗の 山
 握いそく消かとの 蕉
 破れとる具足 藤
 高麗の縣より畑 葉
 お篠の庵 蕉
 ちいととまの永と 山

妻ののち獲意稼あひ来て 葉
青州ちらひ藤の撮折^{ツボ} 藤

熱田三歌仙

十二月九日一井亭

芭蕉

旅藤うゝ着へ沙乞の夕月お 芭蕉
庭とくせへくはりの病雪 一井
とやりくと見状あつ葉焼て 越人
紙漉紙えよ所幸有ころ 昌碧
琴持て庭の上ぬほといり 荷兮
障ふぬれいきゆる 灯 楚竹
記もせて守るふほひ怖れ 東睡
これー紫の汗ぬいゐる 蕉
おけられて又さほ多なりとよ 井
乳と飲める子の我はぬし 人
麻布と様ひるほと織ぬて 碧
芭蕉

商と取こめいふをせはれ 兮
夕乞のせよすゆり雷のき 竹
馬もあつぬ山條の雲 睡
小雄麻のそれ又袖小付を 蕉
花あつ往らひれたり 人
風ふかちけて花の二ツ三ツ 兮
畠よけくおハ遠なり 碧

病床

芭蕉

葉のひそつても花のぬれ
中あゝと人のこれとさう
つくろひて
雪と雪とふひはをれ名月
年くれぬとそそ子鞋をぬく

貞享二年

山家

後年を齒菜に鑑みよ

仔細く

猿鳥古巢ハ梅よりなり

京良へ出る途中

昔は是や名もふれぬ相鼠

二月堂系花

あつやうの信光のひ

系よ出て鳴鹿の秋風

子望致し

梅白くさのふや鶴をぬきし

秋菜よ身より牛ニツ三ツ 秋風

伏見西岸寺任上人とて

わつ衣又伏見の枕をみよ

大はつあう

何とハれに付やうし 董竹

湖あり

幸勝のねハ花より 柳より

怪う小島の素門我名を

すてまのねのたつれ

しつひあるに

いさよのに種まうへんより

大頭和尚のま化けは後より

すてま角よりつるん時

梅意て卯の花おむ洞れ

千鳥掛

和足亭

いせ

かきけりも我はあまの思ひあり
麦穂ふきよるうる月ひの末 和足
ふりてききと鳥ゆふれて 桐葉
ふりて袖ひれり名取記 叩端
便ふれて力待はるる傳ひ 葉言
それとはりの秋の風音 自笑
けうひてききふ麻に耳を記 如風
念力ききこころふきき 安儀
道は道の案に一喝示し 重辰
長者の興ふ背はふけひ 蕉
かきけりも我はあまの思ひあり 足
あまの思ひあり 八百の 葉

世

森透は煙草三つはわきまあり 蕉

ふたりは秋の力さうしきあり 辰

それの秋をふるふちの悔ふ 足

猫あきは猫あきれてきき 風

多田世ふ葛とる女をきき 葉

けききめるをちきききき 言

蕉は短冊付てけききき 蕉

蕉さうつれを背負ふきき 蕉

天をきききききききき 信

五日の風のきききききき 風

菓子賣も木ふれてきききき 笑

長尾のきききききききき 足

熱田三歌仙

桐葉亭

何となくにやうにし葉竹

とせ

あゝとててててて

叩端

田原よりたつ童のつとかに

桐葉

とてはよりけりの中道

蕉

力置る雪の敷相の下駄

端

酒のむ姨のいかに世にき

葉

双六のうりみ紙文と云ふし

蕉

琴の阮とてし袖はつる香

端

髪下を侍従うむとめ表て

葉

野の宮れありし妓王ちの証

蕉

うとつとてなる叶紙とけ流

端

藝者ととむる名月の冥

葉

面白の仕女の秋の妝とてや

蕉

煙風とてしぬし紅粉

四端

共

川瀬ゆく髪を角と結かて葉

舍利とてはれは朝日とてや葉

かしこやうなる叶紙とけ流端

羽織と酒紙とてし葉

ふつとて女とて髪とてや葉

ゆくとて風風の画とて洞とて葉

すふとて笛のいろとて葉

三股のふね深川の葉

菴住やいなり杜律とて味とて端

花出たる竹こそこの葉

葉

いふとて白舌とて吹矢とて葉

蕉

ふとて小僧袖いやかに端

端

力置てお板いふとてたつらん葉

葉

そとてね盆の流うとて葉

蕉

宿のこやけふ極る極
鼻紙又都の連ふと付て蕉
暮る大津に三井の鐘す端
雪が侘ふ漢の焼く袖をよ山
藤より龜の四五百の空葉
松風の餐^{ウチ}又何か吾はくし水
佛と刻む西谷の僧藤
烏羽玉の髪さる女髪にきて端
急かえやふる朝風の力蕉
秋いふはく味まお養ひる葉
白子のをまわつる方の海山
浪ををる鯨の骨ふ花極て藤
陰月を授^{オト}期のかつゝ迄道端
まおてかきくに返る應男蕉

ひる雨のそとに捨たる馬の背端

ひる雨のそとに捨たる馬の背端

男やもめの志ろくれとふ葉

風うらた大年の奴の七つすく端

市門となく生狸の姿蕉

常盤山を盤る助うき葉

産まのころ連歌所の松端

熱田三歌仙

桐葉

はるけと援のそれの袖にちる

ひとり来哉摘む救の一家芭蕉

日うけ山紐子の籠とわくあて叩端

清水ととく馬柄拍の力開水

面ふと世四ふ孰賣る村の上東藤

宿のそやけふ極る極る蕉

鼻紙は都の連ふと付て蕉

暮る大津に三井の鐘より端

雪が俺ふ漢の焼く袖とる山

床より龜の四五百の空葉

松風の簀^{ツタ}は洞か吾はくし水

佛を刻む西谷の僧藤

鳥羽玉の髪さる女髪にきて端

急かえやふる朝魚の力蕉

秋いふはく味ふ拍食ひり葉

白子のをまわつる芳の海山

浪うとる鯨の骨を花柱て藤

陰月を授期のかつう迄道端

まおてかきくにまる鹿男蕉

入日の跡れ星二ツ三ツ葉
宮守の油とけつもとふの奥蕉
けく一のぬも内なる西行揖
面ふ

牡丹葉ふくふちなる葉のかきか
庵小うりて

夜ともいすて風成とうつる
柔と様さるふ

秋をへて蝶もふらふやとくねる
とて喰ひまてくひまひま
年のくれくま

うて友人のねもく人老のね

五重の塔のほろりうき 桂 揖
鶴鶴の尾と蛇の尾に巻れて 端
風より吹かぬくく人の付に 葉
筆とりて朴の皮をとりて 端
田舎ありの物見をみたる 藤
うちうけく前意の香をうけく 揖
たられてゑと酒買より 蕉
根の神又頼れようあつて 葉
おはん帰京の時成らん 山
鍵軸のひくくのちけり書く 藤
猿の栗の付けりくくそ 端
蟬鳴てきくは柿の秋れき 蕉
そふくくくくくくくく 山
のくれふるき物焼てはるに 藤

大

八日の跡れ星二つ三つ 葉
官守の油とけつともく 蕉
けくくのぬきぬき西の 揖

面分

牡丹葉ふくくくく 葉

庵のうりて

なごもいすて風をうけ 葉

葉は葉をうけ

秋をへて蝶もふくく 葉

えて喰ひてくくく

年のくれくく

うて人のぬきもくく 葉

貞享三年

古畑や茶つとゆく男と

初懐紙

其角

日の暮れとてふ雀の鳴き

初よりき去年の柏の實 文麟

雪村の柳又より輝きしと 北風

酒の幌よりあいの 月 二 齋

秋の山も来のりけり雲らる 芳重

炭竈とねてきれしと 杉風

里しの麦田のさるむと 仙仙

我のさるに雨おほひせよ 李下

朝よりこれとておひ通る 峰白

と云ふ佛より信づくより 朱弦

つとよりく連歌の興致とすん 蚊足

歌よせ来るむらねの声 千リ

有明の梨子市烏帽もさる 芭蕉

浮世のあはれ宴れと他 執筆

惜まれし肩の本槿のさる 鱗

ぬほ女きりさうと 角

山ふりみれとのむ様の声 齋

命と甲斐の糸もえよ 振

法のと我より髪とさる 杉

とつりの記とさるその戸 重

嘆日より車とさるその後 下

梅の小雨はとさるかけり 化

二 砂るをぬる葉山子れ 弦

さうに酔て様はとさる 白

殿ちり眠とかさる 鈴はけり

女より小壺のおうけれ声 化
雨さへそいやりかり多鄙墨 齋
門ハ奥丁と破像の寺 白
狸不そにわうふ武老号空路 重
あゝせく牧の所石撰と又 角
鵲の一声夕日残月に何たりて 鱗
糸の糸を秋さひれあて 下
いかた子の本のる哉花は色 白
はれなるといへて世に花はと 根
人あずとふより物なうつれり 揚木
さうりいといひ金山のほと 弦
け國の武仙狐名ある繪にせ 角
京又汲をり醒井の 水 齋
玉川やあのく六つのふと 蓑

元たる眉弧かゝるさぬく 蕉
けー嘆てふさけにえゆる高松 枳
葉るけの風は美崑切り入 齋
かれとて下ふけける狐貳 角
あつれ月夜のかもる 傘 鱗
石の樋鞍^トの坊ふきすも 白
われ三代の刀の川瀬治 下
永祿の金乞くねの風 化
近江の田植英徳又聊人 弦
とく起て宵待よさ人ほお 重
恥よ京の湯の浦あはれ 角
筑紫きて人の娘哉りつれ 下
弥勤の堂よれもひあぬし 枳
待宵の鐘は墮たるまけ中 蕉

友より人壠のおうれ声 化
雨さへそいやかりる都墨 齋
門ハ奥丁と破像の寺 白
理不るにわうふ武老号宅跡 重
あゝおと牧の所石機よ 角
鵲の一声夕日城月に何たりて 鱗
乳の銘を秋さひれきて 下
いふけ子の本のる城死ねを 白
流れなきといへて世に後流を 枳
人あすこひより物なうつれり 揚水
さうりいといひ金山のほと 弦
は國の武仙狐名ある繪にせ 角
京よ汲より醒井の水 齋
玉川やかのく六つのおも 蕉

江湖しよ年暮りにけり 化
卯の花のしれ精も^{ミラケ}もさるが重
升うころせい雀うとよふ水
南むく葛屋の畑の表とて 不ト
歌と基成す屋のつぎ 鱗
腰出る櫓^{ナラ}の廣葉を打合せ 枳
贅は買ろく秋のころい 蕉
麻の青紙抱いぬ人にうつめ 弦
ふらぬ男の軒をむむ 月ト
名の雨たもと七重をぬめん 下
侘約に内の冬れ川つゝ 水
あ車来つく青いあらーと 角
梅はさりの院くの閑 十春
二^{キヤラキ}月の蓬萊人もとさるや 齋

啼き川牛れおそに目れれ 重
胸あいに紙の端と織りて 推
ねもひらうむら落の刈に 枳
菱の葉成まうらみふせて 鱗
本魚ここある山陰にーも 下
囚人狐やうて休むる物方ぬ 齋
萩さー出寸長うはれあひト
同ー時露と香小名紙付て 春
んふうら舞世ハ憚のかう 弦
云ふふむーやうはうう 化
あるーいさう草のぬれぬ 下
傾城成るをれぬかたに 鱗
徑うみふらうあふれうら 重
升うた筆おはぬさうで 白

梅さく 若小日ひありたり 齋
 ちり雨ふふの灯ふに清えぬ 峽水
 鮎とる秋の仲も静かに 化
 停勢紙ふる力小朝日の有るに ト
 捧えりおて 搗 造る 秋下
 信長の治まる代やさう人 揚
 居士と叫るくわく玉の児 鱗
 紅と牡丹千里の香紙かて 春
 雲とむ谷ふ出る温泉とす 峽
 岩根ふと重た地氣紙房に 角
 わく一や三并の若法はとも 齋
 途ぬ急すか紙や川ふ通さうと 化
 管弦紙とすにや月ハ位るく 重
 足曳の鹿山ふ泊る津一さよ 揚
 些

千声とあへる 観音れ川名 角
 船いくつ涼とふうの川竹ひ 枳
 尾長にすうる松のあつ 峽
 床むしるれ七舟にちるる 卜
 連流らりる表をいさーま 白

一ッ橋

芭蕉

花笑て七日鶴えたる 林藤くね
 懼て蛙のこころ 細 搗 清風
 足端本紙ふさうと氷る紙て 埴白
 米とそ外紙とるうる 笑の戸 曾良
 名月と隣へ寐たるまゝ 工 齋
 枝えくく一死相の葉紙うる 其角
 墨衣ふくへいひの壳落て 風
 内外のト 白

とて小立付子の使いつゝ良
一夜のちさう後うけけさる 蕉
松明も顔えんといふゝ 陸角
生て捨子の水又流る 風
孰うとち知れぬ敵意に歎死 良
ことゝの鉢成かり山寺 齋
雪成る川掬やさうに寄きて 白
虹のうゝ日も白ひれき 角
去つていゝ温る成さる力に 蕉
三つり麻のいつ矢成負ふ人 齋
勢くと軍に事ある如く 嵐雪
男かうくの白粉とぬる 風
猿琴に明の風狂成忘れさる 角
ねえとさうく牡丹あつて 白

耳うとく妹う告さる 良 蕉
はれかき冥路に葉を成てゐる 良
札焼て刀はうりの傳へき 風
我う川壺と殿の巾 拳角
猶もとちね歎やさう 齋
糸の月夜の咄踊るらん 雪
おとれくおやむ人のひれ 白
眉ぬく袖の茶屋にふき 蕉
唐の書よりぬ取成さるやて 良
ひとりの買ふ雪の山 通齋
あふれといふをふけ 破れ細風
竹やうねくて塩やうぬ 蕉
相國の極路ひんぐれと 松 用
車成あつて表のやうい 白

山さくくろくもの先ふくろ

古比や陸をこひみの音

三日月日記

破風は小日影やよろろをこみ

煮茶、蠅避、烟

芭蕉 素堂

合歡、醒馬、上

かこふる小田の水落をあり 蕉

月代、見金氣

堂

露、繁、添、玉、涎

張旭はおかきふる酔の中 蕉

幢とたねにこくるゆり、井

挈、帚、驅、偷、鼠

世 堂

ふろに都はあなる所をを

くろくぬ首かきたる板の板

乳とのひ捺る何と夏ふ

舟、鉤、風、早、浦

堂

鐘、絶、日、高、川

あくる早苗の泥にこそと

食ハすけぬ飯を大の乳

詫、教、三、社、本

堂

顔、使、五、車、填

花、月、太、山、開

條、成、枝、け、く、老、の、う、ひ、寸 蕉

剪、銀、貼、一、寸

堂

箕、面、の、街、や、ま、と、無、ら、ん 蕉

朝、日、う、け、顔、の、紅、と、か、や、し、

風飧猴早乾

ようれつる黍のふにゆく秋きて 堂

内ハ火とをを庭のうゝ 蕉

霧籬顔孰與 堂

霽浦目潜鳥 蕉

ぬく人思てそぬ小何るも声 堂

こゝれぬ旅の疎寂と服に 蕉

山伏山平地 堂

門一番門小夫 蕉

鷓鴣窺水鉢 蕉

をぬふりてぬるをやけ 堂

奥より初微の音もに花とを 蕉

臨谷伴蛙僊 堂

元禄中終

其袋

夕照

沾荷

情吟の望みかやる西日れ

潮落うふ草の穂れく 芭蕉

雪の外の鐘とるふ松をて 露沾

幣ふくさるる石あゝ 蕉

入存のうに化粧なる武老ひり 蕉

柴の真又坐とあやとる 露

山寺の庭も狐のさゆて 荷

花^{ヒラ}来^ラ書と酒造るし 蕉

ゆへ平庭日く^{ヒラ}に^ラる鞠の音 露

白た胡蝶の恒と花然す 荷

循張紙標のねとをういて 蕉

乱まゝ綴紙表をかんに 露

調へかた記念のほくも青も出
竹も焼火はこれ盡しき
捧の力一つの忘れ候へて
候つき保し裏の救うけ
みいそくのかのう處やめい
四十雀こそ凡もふりめ
嵐雪

麻島山の力もふり
くも雨しりふ除き
根ちりおる人として保
紙着せしむり
らくは清のふれ
似たり
寺は森でやうなる力
咲のふり

力とやしおす来雨候
雨は森で候なり
雲のうらみ
四月のや廿七夜も三日れ力
深川八雲の中

来買はるの袋や投中
雲のうらみ

雲のうらみ
雲のうらみ
雲のうらみ

雲のうらみ

雲のうらみ

雲のうらみ

誰やうすくふけうけと世を
うくこれいそ花さく恒移りれ

光情

牡丹うも海苔を光れうもせて
あふた目も物うたふやをたれ
系中やものもつうは鳴を花

物皆自得

花はあふたふうひをな雀
花のを種い上やうは州う

其角う母五七日

卯う花も母もさおとすさす

夏にさる母もう入すう郭う

其角

鼠をう隠れて

朝う月と下ふのささあられく

名月や池をううておもすう

白鶴別

接泊うをささうてうけ

時う秋う一のなこり旅のつと

露沾

所とともぬえ風をうの力

芭蕉

山陰う刈田の秋のふさひて

沾蓬

武者追はりー早川の水

其角

暮ううそにほりう花接愛

露荷

あふさぬ雲に枝取くね

沾荷

傘の陰成さくかう傾けて

芭蕉

あふりむくー神山の氏

露荷

暑き日れ汗が悲ーむ接声

沾荷

とてー戸の蕨りたる

沾蓬

薩埵のまねにうろくする月 嵐
 貝ひろいくり破ふまで 嵐雪
 酔ふて人の肩にとりつく 其角
 夕の霞のいそがしき 根松
 根松苗放輝のかりて 子
 池の掬ふにぬめぬ中つと 角
 くれし入帆のえゆるを根松 雪
 世の中紙畫のりける茶の調子 子
 殊にかしらの産物やふし 蕉
 記念し人命の切のころ 雪
 夏紙占とく国の朝風 子
 津の雲のかにいと お賣て 蕉
 二夜とすうのほろ 侍 雪
 一老の連歌紙とむいぢに 子

苗代を渡る雨と雨より 雪
 鷲の巢のいつうたにそとて 蕉
 弥宜下りいさるまのふ 子
 夕陽別
 志ろうねる恰とる世 雲夜の鐘 松風
 一羽こころふ、千ころ 一解 子
 枯るまふつらぬのみにて 曾良
 田中の道の通るこれなり 辰々
 月細く己る衆のそと馬 泥舟
 秋風あうる門のはし 水萍
 露の糸線とほを松の音 風泉
 雨ふいせし雲のきせ綿 夕陽
 猿まうと女あうの情はて 苔翠
 竹陰うけぬかくれぬの 華

夕陽

李白

月出山隈うきまを照らす
 芭蕉
 大燈の葉は傳説に人
 芭蕉
 松風よそれたる野火の如く
 溪石
 朝まはる温家の山あり
 二齋
 陸つ三つはかうよあれた声
 其角
 葛の縄目もゆきこれ一み
 トナ
 縋子ともいたる嫁を我とけ
 嵐雪
 餅二つを口張るも一草
 白
 吾弟の土境より目れ松蔵人
 蕉
 陸うぬ一有て飾りたる宮
 石

妙

手を抱え君のまゝ運やたより
 其角

甲

續虚栗

十月十日餘り會

芭蕉

接人と我名よまんと山時雨
 由之
 中へは人よ松を看しふて
 其角
 鷄鶴のころけと世れたのみに
 其角
 狼狐をたると山陰の鶴
 松風
 かけあうくま生れ露の如き
 文鱗
 新らう舞臺を月に照らし
 仙化
 中の秋画工一はれ帰る
 魚兒
 鯨をうしておろす溪
 船
 観水
 沖板や氷舟にひくは波の如
 全峯
 齡と世成しれ君のまゝ松
 嵐雪
 酒のまじりたる夜の如く
 執筆
 卯月の雪を握るはくちの
 蕉

鰥はる袖はくろく早瀬川之
薙一面よのころ橋抗角
なまのぬ里にきぬはがふし風
月よやふらん向流の麓人鱗
蜀嶺とく匂ひもたふく化
たもぬこく孤汎の傀俣峰
途中小たてる車れ麓は巻て
沖こく船に免されし難之
花もよふ名のほく浪をたれ雪
わつふく居たつては琴の白
傾の岸志くうたせの介に入水
萱のぬけぬれ雪は焼家化
老れ文の縄ふたれはるる之
若流るれーわとの雲守蕉

鳴る千瀉のねはかそへつ白
今ねれもへ船よはる蟬角
起出ても水はる人海のそ雪
初るぬ御寺はたのむる羽水
暮やるふむ板の目けーはれ峰
小畑といーと葉山子伴人風
まねる馬は酒債におされ蕉
は○える星は味にさる白
蕉のまわり面白くしそみ化
幟うこして民の天王角
市牧野の笛吹ふら童声峰
傍くるわーく腰にさる扶風
見ろーと又字れ昂と啼て角
標のーれ蜀はある雪

限もあやふ居ぬ交ふ人 水
代も出て海苔すくふに 蕉
谷原き日うつれ花の本国を 白
声きくられたらうれふも 之

三河吉田歌

ぶと焚てふ拭あふくきうれ

ふも拭

鳴海本原業言亭まよふ
花も井原業言の君が城へを
し詠てたやうにうれふも

京までいゆの中雲や重辰
ふもあふくは拭の力 業言
小松ふりとなきに独ひちて 知足
酒氣さむれいふぬの風 如流
引捨し琵琶の囊と打拂 安信
僕いふくれて牛いふくたり 自笑
ふもあふくは拭の鳥鳴は 重辰
明日の命の飯りう 立信
わたりふねもあふくは 笑
種いふくは 蕉
ふもあふくは 足
かきくは 言
髪は 蕉
身は 風

初々此介よあまことたむむ信
揚枝こきり人の力あつそい足
小狹しそむの風をいふ辰
ころふく指のふけ捨てり信
う紀年城よりてせもやふ足
父のいくことを起やうの友蕉
松陰よとてうまふ彼の声笑
翅とぬるう鶏一泣りひ言
まつつふる龜の朝日をたそ信
こまほーたつ物のかつけ笑
山ちう車よ削る木ぬるひ蕉
煙ふらして思ひあふく足
流はれは行ぬ法の朝風風
狐うくふく草れ草ゆ笑

殿やれて力いむうれ歌あ言
むい姫うころもういを蕉
ふけうし指のうけあける辰
陳のりる屋よ急張つる信
ふ文ねよとてうぬるぬれ御風
手ばたをけかん時あつケ足
くれ盛り文紙あつらゝ雲開て言
脚燈うる弁恒の梅華

ふき掛

坐後の後いふところ
坐ちいふところ

こきり

星崎の雲紙うまや鳴謝
ぬくゆるる雲の煙火安信
假ふのかれは梅と極うて自笑

けろく子猫に逢は、知足
夢のこゝろおとまふれおと、業言
畠のこれこの世に青死風如風
一里のそ母なる河川上は重辰
廻さるて門さるひこる言
市は出てさへいんはゆえれ足
牛はれみてさささ信
初白のさすれう我ひいさ風
力はほーたう探貝のほ蕉
たう細は甲ひうけて秋の風笑
わう初さう宇治の橋守風
産能る西河谷のあれとく足
啄木多たう枝のた枝信
笑はるる魚鉤のたれおれ辰

ふも産とまてのけしし足
辛螺うらの膏ふるる落氷風
角ある眉は化粧をるお蕉
やうさるのみとさるる帳の言
床られぬさるる枕のうい風
眠おくて配おるさるるさるる信
庶子に懐くさるのつゝお足
式日の日のおとぬさるる風
後さるるさるのさる川は辰
探干小願おらるるさるる蕉
笠おあるるさるのさる笑
さる月は外里れおのけ通足
すねのさるさるさるさる蕉
朝霧のさるさるのさるさる辰

あつぬかちらぬわうたして 笑
氏人の庭園多れふはうり 言
井興發むれのまゝくさるゝ風
田とくをあらうに山の名とて 信
うんこの外は種さかしくは 華

雪の花

熱田の社所成廣ありたれ

芭蕉

塵世を種も清く雪の花
ふくく庭のさむきあうつよ 桐葉
明しに松笠を落る風やきて
我鳩帰るふのうけろひ 蕉
秋ふれて月ふさふされ一ツ家、
枝は羅ひし庭さひのかく 葉
机をくおひぬ世と襟にうけ、

五

こほろく鬚の思を割力蕉
明くくる種ぬをひぬありと 葉
破きし玉の境ちる。庭 蕉
古畑はひとり生たるまゝて 葉
およし声や聴るとうし人 蕉
お明は飯着ひり秋の風 葉
まもよりみく衣ある力 蕉
就中買れさぬとすあふ。 葉
温泉のうきえて人もさうに 蕉
け塚の女のむのゑにたれ 葉
たう泣れ紙嘆るけいそ 蕉
朝露にふやれて寝る種は声、
あうく下る坂れまのけ 葉
水濁る一里の河系ふすひて 蕉

あししふまつむ刺のひ陰葉
しり雲幾ふけそ起連り 蕉葉
初夜はゆるふふこそ言れ 葉
野うして経積和とまふか 蕉
夕然と岩のうれあしりれ 葉
おあむむねも似る魚をて 蕉
縣の聲のまう目なる 蕉葉
あき山の伏猪は若る声し 蕉
道一とちび刈かる 萱葉
優婆塞の所廟といひる文讀て 蕉
落人記をたひねにきり
眞菜にぬれ菜のぬす雨の青葉
水桶のほる惘半くさふた
西行の辞はあしぬ花されて 蕉

夏の袂は轆うのかり 葉
侍良古崎の南の隅の果てを響
のけりてこころふとてうへ
春のうらけをわしりて
杜ふう唐ふて
されいふとわれをうたふたの宿
鉄子
けろろの氷ふろろろあろろれ 杜園
千も掛
いらふと時よりうらあひ
膝のあそれをきく
焼飯やいらこの言にふれえん 知足
みさむりし我足の 誦 足
ねをぬく力よ君の子日して 越人
いほり烏帽子の脱ろろ風 足

道一
優婆塞の町廟といひる文讀て
落人記を扱ひ明にきり
眞茶にぬれ茶いぬす雨の青葉
水桶のほる惱半こころふた
西行の辞はあゝぬ花とれて 蕉

麦の袂は轆うりなり 葉

併良古時ハ南の島の果てに
のほりめてこころふといふ

宿のつらけつてうれいしき

杜ふく唐ふく

されいしきといれとふくおの宿

鉄る

けころの氷ふくころおろれ 杜園

千も柳

いらふと峰よりくうふく
猿のあそびをきく

焼飯やいらこのきにくほれえ 知足
みさむくし我足の 孫
ねをぬくかよ君の子日し 越人
いほり烏帽子の脱るころ 足

賤るや馬の歩けぬあそと蕉
思ふに心ゆく波おほるおれ月人
千手掛

寂照庵といふ寂然なる寺
荷今

いくは葉をればと袖も後い
旅の麻の衣と云ふるあそと芭蕉
けこの月かゝる小石は又般若で 知足
御のねとりに野菊折るは 野水
千手掛

寂照庵より結庵して
越人

芭蕉やさうに松も思われす
雪成るてふすねとくの松 知足
海郎のみ鯨と云ふる貝吹て 芭蕉
脊より車に踏こむに 垣人

里

分よせ人け名月成たて小やと 足
蕎麦の貢城通と 冨中 蕉
冬園扇

いふ成るると知足亭の
付りて

如風

りつゝとや落葉れとちの露叫
富士の薪と云ふる冬 梅 芭蕉
市車の志と云ふと雪掻て 安信
秋夜徒ようつにゆふ月 重良
矢の声細き萩の風 自笑
かゝこのとくは安の條庭 知足
思惟多のこゝろと外れお建て 業言
妻のまつけいひよと云ふ 信
本綿機えてぬ個はゆじろ 風
とらん佛のこも目ちのほく 足

あゝ雲霞分て故郷の山道に 笑
散てる鶯の啼く見ゆ 蕉
お度ひ藤枝よ冬け事成るを 信
蝶けゝ觀の軒よとる力 辰
秋やむうゝこにかなる客もや 足
さしゝまろく／＼のつゆ 風
おれとてを衰えておる花枝 信
瘦さるゝのまふつゝる 辰
来うゝよそれや出る朝すそ 蕉
ふのさしゝいとほむ事つと 信
我急ハ春城をさつる一ッ松 風
うき名をせむるさ波の青 笑
くふのこゝとの橋の深さ 足
琵琶よあられ成楚の歌のさ 言

色白に有髪僧のころもきて 蕉
ゑに似る岩多くみあけ 辰
抱引所代のけゝのうねいふ 言
けゝゑまたける仔細の淡井 蕉
貝けうゝとる力けうけけく 辰
お屋よやゝあゝ龜のすつ虫 信
旬ゝとて体に挫たる来うて 蕉
母のいのちとれやふく山 辰
羊弓その嘘のあさけらし 笑
外山の花れやゝさゝさく 足
日ハ永く雨のさゝたはふて 信
厂の名跡をほひくたのく 言

色白に有髪の僧のころもきて 蕉
夢に似たる思ふくみあけ 辰
抱引町代のけしきのうねひふ 言
けしきまたける侍者の淡井 蕉
貝けしきとる力けしきけしき 辰
紅唇よりあひ亀のうづ虫 信
句へとて体に極たる柔うて 蕉
母のいのちとれやふく山 辰
羊鳴その嗟のあさけらし 笑
外山の花れやとて又さく 足
日ハ永く雨のふくたに雲を 信
厂の名残をほひくたのく 言

うれまやまゝ陽炎の一二寸

石版の底新大仏の膝回

太六又陽を高一尺れく

蝶のその即座より

はまののりひ出す揺れ

いせり

神恒やねむいもかけすねん像

神恒のうらふ六梅一本もね

ふらぬのうらふ一本も

即ふらふのうらふし梅花

咲きた次梅の中より初さうら

景清も花足の元より七を境

瓢竹菴

花成名小はしり後や廿日程

いらんとす

旅探してこゝや字はれど排

杖突板もさうり為さう

歩行あゝい扶つと板さ馬掛

ぬる墨や孫の弦はく年以暮

貞享五年乙未改元

二日暮るこれとてい

二日暮るぬうりいせり花の香

風麦亭二句

まきてすゝ九日の朧山くれ

あこくそのいゝら次梅の香

山家よりふらふて炭のうり

ふたくものあういゝあゝ花の香

香は匂へるにやる墨の梅花

うれきやまゝ陽炎の一二寸

石波の底新大仏の膝田

太六は陽を高く石れく

蝶のその即座まで

はまゝのいゝれりいゝす梅掛

いせり

神垣やねむいもかけすねん像

神垣のうらゝ梅一本もや

ふさ銀のうゝらゝ一本もや

即ちさゝのいゝとゆゝし梅花

咲きた次梅の中より初さうら

景清も花兄の元はてさ坊

瓢竹菴

花城名小はゝりや廿日程

徳三日

けねん花は礼のつれが

つれが花は礼のつれが

ある我とわは童ふれり

道の伝とあんとつれり

万葉丸と名のる有途のそ

つれが花は礼のつれが

乾坤無住日行三人

しゆれを揺るぎなく捨る

吉野のそ我もせうと捨る 万葉丸

丹波市

草川て宿ころるやふれ花

初遊

夏のおやあの人ゆり堂の隅

手

足跡をく僧もえたる花の雨 万葉丸

無時

雲雀のうぐはすをうみ跡が

よー遊

花はうりひの日の朝あけ

あけくは花のうみあけあけ

苔清水

春雨の本下ふつとふつくか

西河内

おろくと山吹ちるる花の音

うー遊

花はうりひの日の朝あけ

高野

父母のふれうにふれり花の音

足跡とく僧もとえたり花の雨 五菊丸

無時

雲雀よりうへへととらへて下り

十時

花はよりひに日比の朝よりけ

まじりくは花のうへへあるは

苔漬水

春雨の本下ふつとふつと

西河原

わろくと山吹ちるる山の音

うらな

花より花よあけり神の歌

高野

父母のふとらにきこゆる声

ちる花にふさゆ 夏の陸 万葉

和歌浦

けまふふらうらうらも追付ら
ひとめいてうしろふ夜め衣う
より出て布子賣と衣う 西菊丸

奈良

催俳の日ふうすれは麻子

須磨

後ふれ雲のふたにふくや時を

は後ふれふくや時を

蝸牛角ふりさけよ次子明石

明石坂伯

梢はふやふれさるるを

湖

五月雨ふかれぬものやせし橋

ふみうふみうふみう

去来にやううう

かき人の小袖もいよや甫ふし

ふのうふのう 清るさる 素来

長良川賀志氏水樓

けあさう月にはゆるめれす

物釣ふふて

ねもーろくてやうて想ひ物

物につく小冊とほきてる

声あゝハ船も鳴らんふふ舟

何事のふとてふも似すと見

秋の日

後より秋の夜はひさしに
は後をひきつるをきこふ

蝸牛角よりきこふは次で明石

明石坂伯

梢はふやふやうれきとるをきこふ

明石

五月雨ふかれぬものやせし橋

ふみうきまうきとるをきこふ

去來にすうーつらぬ

かき人の小袖もいよや土南ふし

ふのうへうれく清るそとれ 素

長良川賀志氏水樓

けあさう月にはゆるもれぬけし

移りては出て

ねもーろくやうて思ひ移りて

移のつゝ小冊とほきてるをきこふ

声あゝ船も鳴らんうへ舟

何事のかとてふも似すとるをきこふ

秋の日

栗桿よと月くもはるかに竹の影
菽の中よりてある青材 長虹
秋の雨より物よき言かけて 荷兮
力ふと烟灰まよる山あひ 一井
ひたるーと人のやひひるさよ 越人
葉おとくして屋根たふく 胡及
木の葉ちる板のとも神無月 氣彈
待つうぬる此の答もの 蕉
蒨若て蚊の鳴声は眠られず 虹
それよ物人や妻おとろへ 兮
あはけをまくる髪は冷しぬ 井
死てるもかよ玉あるあり 人
石のひらけぬ出るおれ有 及

義城くむとて藤の液も 彈
火ふくしてぬるとのこけを 蕉
白きたもとの足ある奥に 井
雨乞ひとふし花のうはひて 兮
井 結るる雨の連さす 虹
目おさふふ氣おのかしと 兮
本馬車して子も糸にたり 及
ふまき下敷つちけてかき 彈
切菴おろけ津たふれ 井
さやしの香うきうき 人
人一代の急城とて 秋 蕉
ゆーせいの恨も引ひて 虹
さたかくたれと秋も洗ひ 人
懐く腹あきしてささる 及

下戸とふくめる雪のおの亭
早夏の梅を我々にたふさぐ
嫁せぬむきめ眉かてある
志のひきよまきめはねに極み
踏とやさせるおのとは一人
明やをねねとほそきうねりて
何れもめいねとふとやら
花より観の蓋ふおねね
簾より出るとふのふくれ
はらぬの月とふれに
朝ふいふ酒かりとふれに
送るれつおつとふれに

文料の月と二人とふれに
接や命とふれに
雪とふれに

横濱山

傍や横濱とふれに
月とふれに

善光寺

月とふれに
十六夜とふれに
月とふれに

曠野

海川の歌

月とふれに

酒をいふらふ此頃の 月 芭蕉
藤をうつ後窓窓は雲つらん
理をこふれたる秋のうき人
瓢箪の大きき五石はうき人
風は吹きてゆるる市人蕉
ふよこも長安はこれ急利地、
医の多きところを問ふはしれ人
いそぐと昨きのそにまゐて蕉
ひとり世話をし寺のねり人
け里ふちと云蕃は名成得へ蕉
足跡をうつせぬものけけ人
さぬくやうやうあやう蕉
風ひき終ふ夢のうき人
手もつる後窓の風揺もさぬ蕉

ものいそぐさねみ路なり人
月と花は良の高根とわすて蕉
雲をさへはるころのねぬ人
破土戸の打うち付るまね来、
えせの淋しき夏の挽割蕉
家おきて服紗うつむす寝人
おねとひ居る神子のあひ蕉
人きうていやうと法座の匂ひ人
初瀬は熟る堂のうき隅蕉
月とくき次嵐のうき雲中人
恒穂のさけあひなれて蕉
あやふくはねみ味うくあやめ人
石の雲の誰の洞にむそ蕉
行方れうそのそを消さぬ人

きぬともきく 鞍は居眠 蕉
秋の田代くせぬ事 名はて 人
さうしなう 文字同に 蕉
いっりく 尾底の本業 人
馳をこころの疲てかひる 蕉
花のころ 淡きまうらやぬ 人
田ふーを 倉へて 腥さ 蕉
柱曆

苔翠亭

越人

力出 行燈消さん 座あられ
朝うら 家 柴牆のひよ人 苔翠
は君と名はつ 井れ 家 居て 人
やう 行う かのイロに ちひは 反古
あうら 声は 雨も つけ ほと とき 次 夕菊

よもれをのそく 山の草刈 涯
あくなく 煙のうけ 淋しそ 依々
女房も くれの 田主も といへ 人
終算と おうらう ところ 悲れ 友 古
瘧おさえて あうつ ね 泣 蕉
やう 止ぬ 雪の戸 ぬき 物 蕉 翠
さう 紗 たる 曲 舞の 章 菊
秋風や み ぬ 持 ぬ 才の 表 人
谷の 底の け くら け 月 依
り 下は 後 まで 一羽 紗 菊
仲は ぬ える 敷 盛の 塚 竹
角人の 足 中に 花の 散り 菊
酔ふて 牛より 病る 蕉 風 蕉
鹿島 紀行

白葉よき花影にそよよ木風
泥ふりたる稿とて以て根越人
月哉日海をたふと花影と芭蕉
まよふ玉子とぬきむふりり
わつらうとわてさう花影井友五
もつらふぬきり帯たぬき夕菊
市内とて花影と名といふ依々
花影とて花影の海苔うり泥芥
花影とて花影の火ふきとて花影人
瓦ひさし小橋ぬきり月風
花影とて花影とて花影とて翠
うへへ花影たる名ふの貝五
花影のう小物の個子やうり人依
小蛇とて花影のう花影のう花影風

花影の海苔ハ花影とて人
英一ハ子の孫とて花影とて蕉
里をた花影の本花影とて花影五
たいう花影のう花影とて入菊
鄙懐紙

左柳亭

芭蕉

とやう咲け九日も近花影

くくく花影のう花影のう

新島玄年れうつ花影

とやうととと花影のう花影

酒吞の癖は花影のう花影

ふふふうううと花影と花影

足の裏かて花影と花影

年花影とてふと花影

此筋 荆口 文鳥 路通 左柳 芭蕉

式人の書にんやぬる木因
けつり鑑又精をこする残香
とうへそ灸するたのうし出
書物の内の虫くらひ斜嶺
飽果し猿もいころ恋しそ柝
齒ぬけとふまへ貝も吹れと蕉
力をく路巾にうつてかふる鳥
あうつたつち夜のか別口
一捧又うつるふれ花咲て通
陸とらひこむまじ藤味嚼人
萬葉のとうはういひく因
村とつれすて大は追ふ嶺
新すくひ御のたのれちるさ
二代上ふの醫ハかうりり香
香

揚弓のユミするほとむり良
鳥帽子かいらぬ髪も落くて行
冬ことも正ものさえての大雲よ柝
茶のたてやうも不案内なる鳥
美しく良生れつゝあうさよ人
尾は生つき青のきぬし通
力新又具足とやら城透りて蕉
萩とそたもふ一株の萩口
何事も益成仕あつてはか筋
追ふも連ふささふ糸宮良
丸腰は捨てあり言ひ死香
もの涙しる母の尊とそ因
花の陰撫念庵の草まら行
梅山吹まのころはさう高嶺

十二夜

木曾のやせもやうなならぬ后れ力
行秋や方はいきすうふと布をえ
市令儀や納のやうか酒五升
いゝと酒を雪えにうふふすて
冬ともてすてううそいふに柱

木曾の谷

芭蕉

生ねうゝいゝつふふなむとが
ほとけいふ月ふ寒き葉の 疏 代水
代官のかてふに冬の力をそ 蕉
居風は桶の端をふよきり、
酢の糟を授まにゆれりとい 水
々ふとねんてうゝは相談、

夫

親の時やアゝ一医者ねるは 蕉
座をいりする能はうゝり 水

香箸ねからうゝとるお前 蕉
振うゝおふあたる白 粥 水

うさ衣は馬ふもさるる 蕉
中箱の荒まぬる風年 水

どこかまゝに候て方よく 杉風
はらねて玉一綱の露けき 水

他らまて村はるゝ寺の酒 風
そけておとれふ強き疱瘡 水

初社の沙はるき春いそ紙て 風
伊賀路のうゝに山の裏うゝ 水

徒然集

雪やちうさ雪の下なる路中すて

杉風

親の時とやうに医者おはるは
座敷のしるはる座敷のしるはる
香箸れからとととととととととと
様ううおはあたる白粥水
うさ衣成馬ふもふもふもふもふも
中稿の荒は孤なる風年水
どこかまゝに成て方高く
はらねて玉一の網の露けき
ねらまて村成なる寺の酒風
そけておとれお強き疱瘡水
初花の雨はるき春はる紙て風
伊賀路のとととととととととと水

徒稿集

杉風

雪やちうと雪の下なる路中すそ

刀の柄は氷るまぬくし 芭蕉
唐からしなふく 秋にきうて 依水
秋までよる 渦蓋の 蠅 依々
朝しは布子 依々 曾良
屏にて 捨る 腰の 下 形 蕉
島守は 葉の 孔と 縁 岱
あゝ びま いろの 洞 野坡
白うし ぬ 梢の 寺の 林 杉
髪 切ても 身を 作り 岱
焼うとる 物 足 の むし 押 蕉
貫ひよせし 茶に 合ぬ 水 良
藪とて 縁より たつ 霜 柱 杉
出家は 抱ぬ せり 上る 之 坡
お局の いゝぬ ちなる 卿 力 良

取り 牝の 湯の さめて けり 依
とつ 花は 蓮 摘より いて 野
堀の 物 本に いて いて 鳴 執業
盗人 あり あり あり あり あり

元禄二年

元禄小田毎の月を 忘る 忘れ

伊達衣

と 成

陽炎の 我 肩 したつ あり 忘れ
水 あり あり あり あり あり 曹良
拙う なる 獨活の あり あり あり 喀山
身 あり あり あり あり あり 腰 掛 此 筋
いさふ あり あり あり あり あり 良

取り牡丹の湯のさめてけり
依
とつ花は草摘ふいそめて
野
堀の物も本はうといもの
鳴
執筆

元禄二年

えは小田毎の月をそそぎしけれ

伊達衣

と書成

陽炎の我肩ふたつあまふれ
水わくふをりけり
雪見
拙うなま獨活のあえ地氈を
踏山
身いうりそめは猿の腰掛
此筋
いそふいとけし名ふにゆかり
良

くろくはかくに お賣の秋蕉
萩原の露はぬれても面をい 筋
蚬より拂ふ仇の 松明 山
五月より小袖の綿も抜あき 蕉
落たる髪はとれ揃へは 良
忘られてく人なりもあは 山
ほそく書さるるの優しき 筋
盃はをくくは火爐よりをて 良
年かひより日待つといふ 蕉
をぬきも憂いふいとを 嵐
相のとうたつ具陰の 家 山
旅車ぬるひよりいかにと花 良
浪はうすとのふと動くに 蘭
客よひて汐すなりと 蕉
蕉

大よほろくあちのむく 良
城北のいつ雪暗る蓑ぬれて 山
起て火城吹く種つれき 蕉
刈てく迷ひる里月夜 蘭
くんで情うせへ麻繋ぐより 山
山風よとこひー、と病る栗のい 良
黒木ふとくへる谷陰の小屋 北 鯉
たり嬌と身をやはせんお累 蕉
あゝみの百合は涙くけつ 蘭
狼の息をてぬるふみの力 嵐
水の岩をよ佛 他りて 山
まゑに飯坊の温泉の熱き 蕉
たひ糸をひたる園のうち物 良
何ゆき人の証者と多岐下て 蘭

膳又居れも鯛の漬焼山
一門のきふんころものさめに鯉
イニてろるのさきさき
藤成つてうす松政の筋竹

未来記

草庵に拙さうあり門々
其角瓦雪あり

と云

西のふは拙とさうや草れ餅
る又訓一蝶さるの児
野屋敷の火縄もゆるいゆき
山のわろとれ鐘守もあり
糸下に力毛の釣のうり雪
風ひやうにさきくしの雲
傍輩に相撲の打ちたれ
帯回ころるに金れたる雪
麻玄とて初雫とりぬ南無太意
角

全一

豆餅仕さるる青され東風
酒さす扶まおほそ記をた
剥やと穿る老の紅葉角
負軍功者に引てゆりあり
ふさひさるる雪の四方
見そとて校庭へ這今月の友
菴の雑ろと啜る小雄麻
一通り彼岸の花の咲ちうて
日永よりくる暖縁や太泰
あたりかき綿るさき弱法師
市医者やうに伽藍さる
寝臥浪のりと追まじ角
提灯ある町のいじは雪
女房より不慮の亭と云やとて

蕉

高田の雪花をひくく角
夏まき花の孫ふゆさふし雪
たふち風のふ草へまろ蕉
まのふれ半よせう々市井角
に湖披露の田舎六て雪
とくふうと扱ふ月雪おほき蕉
いほくとまうと晴のしらん雪
糊たふに四手おまけう々角
とんどとのひる男足才蕉
一まはに戸城をさかるふ高ひ雪
みたし汲んで井の口前蕉
栄へよと未ま成地花の陰角
三人こらふまれ月うじ雪

葉子分四ふ芥子人形やり花其角
枕の口や梅ハ笑人おわいり嵐雪
杉風ふあまうう

草の戸も位ううおと雛あ

鈴ふ

松しやや名にあられぬまは徳
松しややおけふ二人ま死人素堂

千ふと

りまやまの奥の眼いふと

日光山

あつたうと青葉いふは相のえ
柳をてくろ松ふは夜うく
郭えううとれ海のううなて

雪丸け

冬頃家探亭

珠有く人を投おのふ世哉

芭蕉

青丸を復きみはと推の哉

翠挑

ひつみに市のかうな夜夜て

曾良

町の中ゆく川きのか

蕉

雪のふきみに居れく冬涼

挑

秋草生く惟ふいたそ

良

もひいへ解るに血がえん

蕉

もつれた髪のかみ合

廻輪

尋るに火が燈付る家さじ

良

盗人こゝに二十六の里

挑

松の根よ夜がふくて年と

蕉

雪うきふて直ぐ始る

挑

冬三

^{1=名所。}兼あるに小野の炭俵

端

庭ももろにわたる家

良

あけ方もふゆふにも通気

挑

庭ももろに胸のこい

蕉

綿繭の時ゆく花の情り

良

たの。羽よきふ蝶の筆

挑

日傘をひきふに探る言登

端

衣成もろにわたる世の中

挑里

酒のうに谷け枝木と併え

蕉

お人へる胆のね明

良

高野者の聖のを同呼

挑

本林の意方にも木のけり

端

同中の強つてはあきまり

里

一登の家城もろに修る

良

乞食ともあつて浮世の物持
 洞の地をよこもるなり
 猿の洞や深き人蕉
 流人葉薊る秋風れ青里
 夕もやうと朝日ぬかぬ
 来とれちるに流の白浪
 猿の身れまゝとて翻良
 奥の風雅ぬかぬとつく
 秋の雨に所ぬかぬ田置で
 孫生るれまゝとて悔日里
 山居の地あり望樓の五尺
 たらぬまゝのいほむとて

やー雨なりうせいとす
 えなまゝのいほむとて
 木啄も蒼いやうにぬかぬ
 空城横よるひきとぬかぬ
 白川
 白川
 衣表紙
 風流のほめやれぬ田置
 子夜をぬかぬて我まゝけし
 芭蕉
 等窮

イニ 昔うらも葉は月と云ふことなり

あふねたりま葉は月を暮りて 等雲

イニ 昔の秋の月と云ふことなり
秋去りて月の縁をくれと 須竿

あつさろく久れ羽のあはれを 素蘭

彩虫は讀る曉の 声蕉

ね齒朶は吹よけりる 齋

酒の遠根はひきくろふし 窮

聾入の淮はあてりてつら 良

されて送る頃極のふ雲

を貢と狐神よりしむ 拈こよ 等

力のひつと狐ふよりしむ 蘭

拈しては魚釣りかぬき 窮

望の望はする声けり 拈 齋

梅は出て初瀬や芳野は 蕉

かともろ谷の狐鼓をりく 良

林一とや湯ちつともきくぬは
殺生ふの下はしるるあ
花をたふにけりぬ導はて良
酒のゆふひの醒るころ風焦
六十の後こそ人の睦月かれ窮
蚕飼とる家小油重ぬる良
伊達衣

素門可仲い栗の木うけに居候
いささう栗とらふふまの西の本
とて西方津まはるるを行基
菩薩の生れも標は本は用ひ
うふとや

とて候

かくれ家や同じぬ花ぬ射の栗
ゆれよほくろけとあるふ
切り明と山の井の名い有あて
畔傳ひとるるれぬ
栗齋
等窮
曾良

六六

いささう栗とらふふまの西の本
あふねたふ栗は力れ暮りて
イニ 萬葉の秋はつとて
秋あつと月の縁をくれと
あつとろく矢れ羽のあはれを
影をぬ讀る曉の
お齒果ふ吹よけける
酒の遠根ぬふとろあし
聳入の淮ふあててもつとれ良
これて送るる傾城のあ雲
賣と狐神ふとろむろ拙とよ等
力のひつとぬふとろる蘭
揺しては魚釣うかぬとろる窮
望の望ぬすう芦れとろる
梅は出て初瀬やきつとろる
かとりとろる谷の狐敷をうとろる良

あるふしにまぬきくとも声
 ありきそれぬき登るくは 窮 蘭
 ぬきぬきなる年のまゝの 竿
 かへて登の膝やねたき 蕉
 うた床のまゝとくは中夜とほ 齋
 朴とかたる市の生酔 窮
 行僧に三社の院城いくれて 良
 系合休てしめつたの種 蘭
 伽ふある崎野の餅ときい 窮
 四五日力ぬえとく登のた 齋
 う付てういふと黒れけり 雲
 麻の音絶てきりせぬ村 良
 冠をもしぬきとくつに泣き 蕉
 うけうけはくく又ぬき 窮

多きそれいせふと人ふ人 蘭
 まもせぬせりき夜のは 齋
 入りけり四門は法のたれ山 良
 泣くぬきとくは遊生の宿 雲

志のふけ里ふくまき将ふと

早苗くちきとやむり 夢 齋

佐原店より旧路のちと

係家の什物哉拜す

安もたけし五力にこれ身 機

安も山の及根神といふあり

くてやうて

安も山いづこさつこのぬき

安後のぬきせうとせし橋と

挙白う鶴ふはかりい

揚より 招い二本と三がこし

招き

招くやや鶴ふはかりい 曾良

招き

招くやや鶴ふはかりい 曾良

卯花よ兼房より白えれ 曾良

五月雨のふりこのこ 曾良

尿前集

冬風よの尿より花もと

尾花はは風亭

とくしふふふふふふふふふふ

這出ふふふふふふふふふふ

やふふふふふふふふふふ

春竹する人い右代のすうこれ 曾良

とくし

宋とや思ふまゝ入殿の声

新風流亭

あけふの室たつぬる柳れ

雪丸け

風流

柳たつこの我宿せやうやれ櫛

くくめてかたなる風の意もの 芭蕉

柔作り柳ふ花と折えて 孤松

雪ふかくは虹のもととを 芭蕉

そくろなる方に二千里隔たう 柳風

馬市ふれと駒むくせん 筆

雄気たる父うり矢張り 蕉

峯くくろくして判紙ささむる 流
梅さうん三寸もやじに唐瓶子 良
とたも紙上ヶて通と 燕 如柳
三歌さるる夏よ遊に思れて 木端
涛の音とくも山の墓原 風
雪さくぬきいたのれと 柳
荻端くくろく端のはや 蕉
りそく月紙煙のふ社く 松
寂めくくろくと寂さくく 端
さなる花の今に衣紙さる 蕉
かけくくろくとゆるる 良
たのくくろくと茶紙挽さる 流
果かきと悪よかりにさうやき 端
柚香がくくろく 風
イニ 風

ほとんの常風やうく 柳
老傍のいて小孟けえんと 蕉
武士さたれいる 東西の門 良
たのくくろく 蕉
お織よけくむ草朽の力 流
秋文て接みふさん 蕉
くくろく 蕉
さう 風
脚端の裾よさう 大端
奉る 蕉
よこれとく 流
はく 風
さく 柳
さく 柳

うきいとうきう 坂原宿 良
雪九け

大石田高野平た雀亭

芭蕉

五月雨城あつきて早し雲上川
岸よ蜩鳴つなく船 杭 一栄
瓜畑いさふそよ 萩まらて 雨良
里とむく人よ 桑の 細道 川水
牛の子にうらふくさむ方言 栄
雨を重し 懐の 吟 蕉
侘を笠城まうくにあてふ 水
ねむとひびく 國の境 目良
永樂のふろた寺 紙 裁て 蕉
夏と合とる 大鷲の 紙 栄
燈物の香城あうつと 良
半

瓜 ねうつろ ぬたの 石 水
捲上ろととれよ 見の 栄
あつふ人よ 告る 秋風 蕉
水 寄る 井 良 け 力 栄
さめと 井 栄 とうと 出と 良
花の後を 瓜 城まうく 花 遊 栄
絲く人いとおひ 山 陰の 塔 水
稼多村いほ 世 け 力 蕉
刀うと とう 甲 栄 良
むく 垣人い 通らぬ 岸 水
もの 乙 たいひ 削る ね 木 栄
星 糸る 梨い とう け 良
集よ 遊女の名 城まう 力 蕉
麻 苗ふと とう け 垂 足 良 栄

柴賣よ出て家路ささるる水
 合款ツタ嘆ツタ本陰と居れけりな
 たえくくつらにふれぬ良
 古つのおうと跡にうくう水
 云葉満ちるふのふ合采
 雪それ所をけ市の名残とも良
 殊掃の日かまの客蕉
 ふに人とたき懐紙かきこれ采
 やりり鳥のやうに入相水
 平流くも明日は越えて果然蕉
 山田の種をいふしう雨良

花摘

六月四日羽黒山本坊より
 おいて興り

有るや雪風かき風風の青

芭蕉

主

住不す人のむと人夏草 呂九
 川舟の徳は蜜柑引立て 曾良
 移の飛あしと足あらしを 釣雲
 泥水よ玉もうちうけの言 珠砂
 こたも南も張うちり 梨水
 ぬるうての星も陰星よを我て 雪
 百里の旅を故郷の半返蕉
 山はくはくはに城の記と老人丸
 斧柄をくひ神木の森良
 ふううこの江をさひけり雪
 豆うとぬおの何とれく鬼丸
 古所とちかきうと接皮蕉
 糸よ豆枝よとちかきうと接皮蕉
 力えよと引起されて愧恥良

髪めくろもろ羅のつゆ蕉
すけとろく太のむじに花おて丸
的場のとろく又さる山吹雪
春松経一七つのうれ力石蕉
汲ていたく醒井の水丸
足曳のこしむさそも接ぎ表円入
敵の門は二枚麻ふたり良
かき消るまの砂中の地蔵を丸
まきととろく山太の声蕉
うけ雪の椽のうれまの土きく水
温泉の香は思はる朝日淋し丸
龍の青紙狩者ふたを初て雪
とろかけしはるおとろけ法入
力のふあけし風を骨にむ良

鍛冶の火砂と指書の紅水
あうろ相ふえけしんち丸
つ子おとろく行萩の空雪
盗人よはまそふ味う身とほて蕉
いのりもつとぬまうくの鉢良
不登のさうれ小流を善法浪會定
幕あさ上る乙名の舞水

とろくさやふの三日月お茶
かろれぬ湯屋にぬふけ萩
湯屋山新ふむたの洞うれ蕉良

うつしや山越出羽の初花よ 芭蕉

陣は車の音はくさる井戸 重行
宿機の暮いさかしく援あて 曹良
国跡生の末の三日 力 昌九
我親よあかきる採れ花 行
松風放蝶と付し内より 蕉
山の塔よささるる山帆に 丸
葉ふさき星いふるうに 良
栗得は日毎の無ふ食飽て 蕉
うれちうさけ新をふれ戸 行
あつ撰成母の記念ふ極まれ 良
雀よのこに小田の蒨そめ 丸
け秋も門の板より散るる 行
赦免よもれて掲ぐる力 蕉

さぬしおおふもりきき丸
若の女おぬよものうけ 良
婿入の花をる馬にうち弱て 行
もとけ廓い畑よ焼ける 丸
金銀のまも一歩小改まり 蕉
奈良の都より豆腐初る 行
け雲よえたりとまをて金揚て 良
麻巻ふくしの化粧うつくし 蕉
遙けさ月成後夜と筑紫松 丸
さふしに友成くとせて 良
千日の菴はじとく小ね魚 行
蝸牛の壳と踏はふに青丸
身い蟻のいふうと着る 蕉
くけてあけと女郎あふ 行

あはれりる力成り押の空にえて 良
温泉かきける陸奥の秋風 蕉
初七のいよいよたのしみ氷の極 丸
山とれ能る宮の青くつ 良
あま衣男にききけることよて 行
りかき入るる歌のつと極 丸
花の時鳴とやいふはみも 蕉
然とくりしきれ山ひと 良
はつと山

出羽酒田伊東不玉亭

芭蕉

あはれみ山や吹浦くけてる涼を
海松のうら寂またくむ帆遠 不玉
力出の岸を成り人酒とて 曾良
氏の竈のけふる秋 風 蕉

吉田

あはれりる力成り押の空にえて 良
温泉かきける陸奥の秋風 蕉
初七のいよいよたのしみ氷の極 丸
山とれ能る宮の青くつ 良
あま衣男にききけることよて 行
りかき入るる歌のつと極 丸
花の時鳴とやいふはみも 蕉
然とくりしきれ山ひと 良
はつと山
あはれりる力成り押の空にえて 良
温泉かきける陸奥の秋風 蕉
初七のいよいよたのしみ氷の極 丸
山とれ能る宮の青くつ 良
あま衣男にききけることよて 行
りかき入るる歌のつと極 丸
花の時鳴とやいふはみも 蕉
然とくりしきれ山ひと 良
はつと山

糸江や雨よ西籠うわふに
け哉や鶴徑ぬきて海すし
糸江や料院にうふ神ふ 曾良
海土のふや板をさきてう縁 低耳

~~~~~この果成~~~~~

はこそぬ整うけきてやみさ葉 曾良  
糸江や佐渡は横たふふの川

~~~~~連江津~~~~~

久月や六日しつねの板ふ似す

益義

糸江のせたる柵の 一葉 左押
柵旁は飯焚くうふふきて 曾良
糸江のふふのふせ上る 眠鴉
ひとと常ひうふふふせせ 此竹

上六

松のふよりほく 供 徒 布囊
夕つじ庭ぬそふふふれ葉 右雪
たふひふふ葉 砂うり 水筆
おふひうけぬ 眞成 傳ふふ 栗
さぬくの場成 葉もふふに 良
おふくのふみれふの指ふて 義年
鏡よりほく 我ふふひふ 蕉
かふれは 朝ふふふれは 葉 栗
麻引て来る大のふくふ 雪
庭うつふふふふふ 葉 衣 鳴
たふふと 武人のふふの 葉 栗
花のふ其ふふふて 葉 雪
蝶の羽をふふ 幡 燭のふけ 雪
春雨は 髪利ふふのふふふ 蕉

香いらくしに人しの文良

日

右雪

星今宵昨は約束して

と書こゝしき初刈の稲曾良

瀑水涌まゐそく布はきて芭蕉

いふ十二百か

粒粒て小枝は花の名紙あり也

雨のしづりこの日は長閑あり良

糞紙雪車もねじり雪の上蕉

一むく鳥人ふきて花雪

金山寺侘て小砂紙拾ふ人右

科のむく紙臨陰の落也

うねるの面角に奥の名とよき蕉

人いそつしに年れきうれ良

七十七

松かゝい荒てけしきの音は雪

み紙射させる猪の床蕉

修け者の紙紙めしに硯水右

往昔の力山は同たし也

接皮むく老のかゝら秋き蕉

時ふきてあけろく牛乳を雪

塩漬の孤村のくつろぎ結人

法あれかうれす法しき右

かゝり地蔵の縁は衣ひて曾

爰紙おろせる里の物陰雪

他借紙多つて花の言はれ蕉

才本紙よりぬく梅のひと生良

紙後の紙後の花女のいふ

すうつるに日霜しと

ひとつふは女もあらず秋の

あけふに人しと

ふせのふやふふ入る有秋海

一笑う悔しと

悔しうとけ我は夢に秋の風

少女幻庵

秋暑きうしよる秋の風

芭蕉

うしよる秋の日の影一泉

力うしよる秋の末うしよる次て左化

遠るうしよる秋の生垣ノ松

秋の治の門城なりとて撫育竹意

小桶の清水むしよる入りくれ雪子

ま八

せうり生長せしも咲けん雲口

鳥放ちやるに一の栗原乙州

詠み人うしよる通ある如く如柳

ともい消ちをい雲に出る力北枝

肌をうしよるうしよるうしよるうしよる曾良

とのうしよる本うしよる一なる柳疏志

二つ屋いしよるふれ中と縁組て泉

うしよるうしよるある圃の候月蕉

系うしよるて麻中ふれうしよる衣枝

あーたふむむしよるうしよるのうしよる口

その戸の花うしよるうしよる花を浪生

畑うしよるうしよるうしよるうしよる良

あうしよるうしよるうしよるうしよる秋風

卯の羊

歡生亭

長久

ぬきてり人もたうしやふれ萩
萬うられやすけれふく家 享子
力えとて撫子も出と船上て 曹良
千ぬとてひく紙納めうく 北枝
松の風登麻のまけいよめ 二蟾
車になうへて馬の一ひれ 志格
日代往うり湯車のまも出ある 斧ト
下戸よもてせてまけ酒持 麴生
^{上村雨}紫の古れ^{上鑑}鍛もちとれたう 李邑
互の地系は松うくとや 祝三
晩鐘は鳥の声もる交り 夕市

主九

歎哉とてむる穿雲の船焦
肌の衣女のことりとすりうろ 格
ふとぬとすれて我うつと 蛆
よりかろ本より唱出は枝 枝
雷あうふ塔のふれ月り 良
まよとめい非れうらも只也子
胡家さゆる林の胡う月色
おもとろうし虫い声れあふれ市
ひうを多う力れ市 陵ト
まうかろ花よまけいよめ 生
雛うる雙又通たつとろり 三

燕歌仙

北枝

馬うりて燕はいりる

くふねとてふ山の曲りの曾良
力よりと角力小猿泣ぬれて色蕉
鞘よりとてやうとるけり枝
青閑と抹の花とむ水の音良
柴刈とてふ草の無通蕉
雲よりいさりの心は夢れ寺枝
於女に五人田舎とてふ良
落ちとて思ふ名もはて蕉
髪ハ剃らねと魚喰ぬ枝
蓮の糸とて中し罪淨と良
先祖の金貨はとてたて門蕉
有明の夢れ上座とてか枝
赤き山とてぬ桶の弓竹良
あそ風ハものえぬこれ洞と蕉

半

志ろと狭のほく葬れ枝
花の香ハたき都の町造り良
まゑ紙のこせる玄仍の箱蕉
毛糸とやあくら新波の圓枝
根の小鍋を出け芥や起良
まよふとて志とねのほくお琳ハ蕉
笑しとてのそくは後面枝
はさ小袖葉也賣の虎と蕉
肥花人ふろ人の柔畠、
略とてつゑに居る樹とて枝
あつれとてる三日力の根、
初めぬ草れ花とて修りしと蕉
小いともちつく伊勢れ神風、
疵瘡の素名目水とてきり枝

ふくれ墨り枇杷つゝるこ、
ほそ長ふ仙女の姿たとやに蕉
あゝぬをくほる水の白波、
伸張う字治のうろと打縁の枝
寺よ候とたひる口上、
寝つきておはん花もあやう
酸肥人とやういふるり 蕉
筆

萩の枝

路通

一泓り足くさる萩の枝う那
むしりのつひを成落縁の下 菊々
紙もむしうとてあう分れて 白之
にうしにたしむぬははく紅 残夜
極末をハ樹末ふ新枝むし人 芭蕉
食のともあふ事ハおほえ 雪良

半

肌ぬきて人ふえさる夕向れ夕
児とてあす時のわたり 山通
たさめのうろくに條 破絮庵 良
ほそれあうと接葉うひ入 木因
葺よ花もをくもよきり 夜
力えあかり 様のお衣来之
さうりくの貝拾へる布ふさ 蕉
地獄繪成なく極の衣さ通
さぬしけ尻目に寝と眠らん 因
跡う恒根ふふやふもかけ 夜
豆腐ひくさるえすぬ御の祀之
るの菓とらうと住あう 菴 蕉
れうしきや落し魁むなて 夕
あうしにえる宵れ 為 望 良

よもすめく秋風さくやう山 曾良

小松ふふふ

物さへ解ひささく余波これ

幸は神社

力清しぬりのもてるぬのよ

名月や山は日か定ぬたう

種々解

力いつと種いしつる海の底

如水面

龍居て木のく草むと拾ふや

本因亭

かくれ家や力と案とに田と反

如行亭

やせあうりうりぬきふれつて

千鳥掛

急足つオの新宅然す

急と

うきさや雀うろくふ脊たの栗

蘇よえりる那家 荊 萱 急足

なけはと岨の編櫛きあて 安信

風呂焼より力のつけほの 蕉

枚垣のいあふいとと鴉声 足

もくあうりて紙み打つく 信

いせの近きぬんとて

恰の二見まづれゆく秋を

そらさうれ押あひぬ市はま

長尾時

初時雨搖もふしの秋はけ

多胡碑集

つこ子もけしきつる金雲

芭蕉

おまよきふけりた水仙 良泉

羽帚の風やむね又軸よけて 梢風

居をぬいそむ力の挟迄 之園

麻の声義のかりふれ衣る 古茅

さうく落る雪のそん栗 半残

雞跖のやふふふふと折とて 品

もの食うもの蝶のうるさ 蕉

光ねう磨斗はく位はさうま 園

はうれふとけふふのふ松 風

ふく紙衣のひしふ汁ふて 残

公山

袴もろくてふ列をうり 芳

馬の音傍まきのとりふ 蕉

力入ふふ不二のつてた 風

秋うせの簾ふるいせもて 品

蕭ふふりくち寂のふ雀 園

扇ふふれい常にぬる花の並 芳

羽織をろくまの糸ふ 蕉

袂えて耕を肩さうちやとめ 風

首の元たう頼朝の 雀 残

お雲よまふり下れ句成出ろ 蕉

ふふ事ふふ奥の客 品

苔生し君の車傍ふはくれ 園

林ふれふ結ふ葉のふ 風

寐る時も訓とい安れはれ音 芳

風推仕上し酒のそれ菓子蕉
世の中ハ機煙界ある旅衣品
ト記るこれハ佛切たき残
猫璃煙ハ月成吸りしこ風
僧の盤刺る盆の口書
ふふふハかみふふと踏みて蕉
鬼ハくまし時ハ細しる風
生れ来て煙草のやめふ氣樂品
赤ハ髪かきしにぬきしる芳
左義長のけしきふりては残
かきふく雪ハ及ふとて墓園
金屏の松のたひやそるり
あふふふ

おきやいつ大佛のけしき

落洒堂

浪花津や四ノ井ふもそは

あふふふこれふふ人衆

あふふふ

えいふく梅とんのそとあり

落柿舎

そ嘯ハ墓もめふふと種と記

帯来せふ似てもせん種叩 去来

何よこれ沙をの市にゆく鳥

之孫三年

薦が忘て後人いふ人衆のそ

写とめさる

暖屋のねくものゆりあはた

時ふてや花やそふる捨置 園女

二えの忌辰おとつて

うゝわれうゝはれ花は雲

俳諧集

太神宮法樂

と云

何の本の花もさういふうれ

声よ朝日試食むうらひ寸 益光

まううれ葉の橋雪にたて 又玄

二葉の董所幸訪り 雲菴

有明の子紙を指よりつみ 勝延

條足とふたねおのあつ火 清里

初り柿よ嵐のかきあつて 光

門細めふる田の中れ寺 蕉

山路来て清水かれある御汗 菴

かゝる雪成たのひ典——と 玄

女のとちた御館の破とれ 蕉

甚よ付つとて洞落——つ 延

いぬうてに酒さふくはあひ 野人

陳のかり屋よ傍のうらて 光

あうきにのほもとをとて 里

はしめてはる國の初稻 菴

漏る力紙紙と機織る寒に 玄

藍のしみつく指く——人 蕉

神役よ雇^{ヤト}をよめるは運河 光

返寄ふはするこめの侍 人

急なと池の何やめ成おふて 延

水鶴と追ふ記—— 曉 玄

多葉粉吸人毎のほのぼの 菴
惟うふあそやわううううて 里
あううあ、樂の一ふ、紙、延、て 蕉
豹りのま子の浦、い、い、り 光
声、ま、う、表、は、張、る、秋、の、蟬、を、 玄
あ、う、う、風、は、張、る、吹、ち、る、 延
あ、う、け、て、お、毎、け、力、成、る、歩、り、 人
こ、う、も、と、と、む、あ、れ、も、あ、れ、 菴
親、い、と、り、案、よ、う、紙、水、と、飲、ぶ、る、 光
ま、う、と、い、紙、成、る、は、代、お、す、 蕉
い、坊、成、は、と、と、と、と、と、と、と、と、 正木
ゆ、り、こ、い、權、よ、う、紙、成、る、と、 玄
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、 延
短冊のことと、紙、離、の、昏、人
半七

一幅半

紙衣のぬるも、お、い、い、い、れ、

芭蕉

と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、 乙若
酒、賣、り、紙、と、い、紙、と、い、紙、と、い、 一有
板、屋、の、の、の、の、の、の、の、の、 杜園
ゆ、う、暮、の、力、ま、と、案、よ、う、紙、成、る、 應字
馬、よ、西、風、成、に、け、て、い、あ、う、 葛森

。け、ま、芭蕉翁の句、い、い、い、い、い、

稲妻のひらいて、ま、い、い、い、い、い、

世中のこゝろ、ま、い、い、い、い、い、 蕉

ゆ、う、へ、う、う、と、い、い、い、い、い、

命、と、と、と、と、の、連、歌、と、懐、か、

改、八、千、て、改、文、と、い、い、い、い、い、

日あとし習る家城あひて
乞食奉る橋の本れ中
聖し丸雪かり此月もつ
目前のけしき詩か能
ハツふる子の歌ほけぬ

陽をやは紫胡の系ねすき

花垣の底いそのきき
やへさくの料まつれ
くるとひはつこめれ

一里いれ花雪の子孫や

ふとひいあひてつ花さうり 去来

中在鳴中の拍子やわの声
枕うふとさけいねるに声

呂丸をいひ

曲曲よりいれい家のすま

已う光

種芋や花のさうり誠愛あうく とき

火燧ふさけハ風さうりあり 半残

酒酌のかうりもほりてまきて 土芳

ぬれさうり草の衣 良品

有明の七つ歌ある葉院は 残

ひさこの札と附さうり 蕉

いれ風は枝のたうり 品

小僧の辨はにこころへとも
 芳
 やとくと矢洲のほろ芳の清
 蕉
 多賀の抄子もつものとも
 残
 手松のともとも持とも三輪組
 芳
 人よとくはく基名にそし
 品
 萱州のともかひぬきとそ
 残
 秋たけ蟬の啼死ふりり
 蕉
 有くもて石屋根まらるる音
 品
 こ月もて青た藍瓶のあ
 芳
 にはさつほの花れは像は嘆もて
 残
 振のつ来る水のりり
 蕉
 猫れ眼の六ッ枝^{カキササ}枝に四ッさく
 芳
 あとのともうひの鐵蘿蔔と切
 品
 からうとも病人あれは惜まぬ
 残
 芳

なさくやいて出る髪結ひ
 蕉
 どりくは紺屋の形取ちし
 品
 冬至の妻はお思ひま次
 芳
 化粧もよそしも思ふは
 蕉
 まさえ振のいともう々々
 残
 朝夕はたひのきき腰まつ
 芳
 いとあつれかるおとふれ
 品
 田鼠の箱倉いあはる院て
 残
 風ひえそむる年のみは様
 蕉
 露一とれ紙のさたさ^はは
 品
 死とも人の何よ来るべき
 芳
 外風や吹起されてかいそぬ
 蕉
 筆紙落せし鳥鳴出す
 残
 ありとひとの花は摘むひ
 芳

古来よ直の大轂うちう 品
ひここ

花見

芭蕉

本れもとふけも終もはうりぞ
西日のとつ小能天来く 珎碩
総人の風うれりま書て 曲水
それもあるハぬを刀の鞘 蕉
力もちて假の内裏の司石 碩
靱白はくる拙うとやとこ 水
鞍並るこ栗駒は秋のまで 蕉
名いさめくにほり替る雨 碩
入り込は後防の涌湯さる暮 水
中ももせいのもれふ伏 蕉
り入る城唯一方へあけり 碩

九十

月それ筋より急はつう 水
おねより身ふ抱合てあはれて 蕉
力える奥の袖おもとあ 碩
秋風の恥をこころふとあ 水
丁村うとや白子若松 蕉
千般よむ花の夢うの一身田 碩
巡礼死ぬる道はけり 水
何よりも憐れつとをいれ 蕉
みかくはとの力えかこ 碩
羅は月城いとをふ脚を化 水
態計のうれと泣きひく 蕉
は来り紀の宴ちう頑よ 碩
酒てとけさるけさるめん 水
双衣の月とのそくさるさかり 蕉

わりの持佛はむり入る仏 碩
中へに土間小居れは雲も水
我名ハ里のふりうものく 蕉
ふくすれていぬ痛の肝と質 碩
力ねくま内なるる 力 水
花とくねにやう拓かゝ拓て 蕉
たゝ四方なるま庵のあ 碩
一費の勢むつうと返り 水
医者の業ハ飲ぬふら 蕉
うれ嘆ハ芳時うら気欠 水
忙よさふくまれん中 碩

當見

かろえやねに酔つて来ふ

雲のおやもは出れ雲つゝ 凡兆

幻位養一合

えたのむ指れ事ありま本立
ほくおに背中までやふりて 曲翠
雲と入るの上も苔のふり 乙州
夕も胡もつゝに凡の花

信ふゆく人

群のやううとて来は御因なく
くつとりの泣きつゝと友の山 野水
海ふは五月雨さや一うと 凡兆
朝近に雲梨をうれ猿れ是 千那
お控のやとりやや友の山 洒堂
鄰とつやぬ水のさけり 犬若

やうも小来うむ推ふ 如行

紙帳とわうて

おもひより安帳ふけとちりり 野狂

麦の粉とわうて

一袋これや多田のそと麦 之通

五左衛門

やうてぬけしぬいそはばぬいあ

俳諧集

大津奇香亭

芭蕉

いろはのそとぬけるをるが

せうて涼しにききの青 奇香 尚白

くひ力のぬき糸にたういて 自笑

ふよいくのそとひくあり 通雪

ねの本紙秋風とそとわくし 通雪

紙帳やぬて参の系より 松洞

うかれたる女ふれて目の様を 香

矢ねの紙のよりの無くと 蕉

くろく塚よたの文紙拾ふを 英

材の棠とるをわくし 雪

やうい言ぬ先より出で雲を 眞秀

ほ世の介れ清きとく寺 白

ありし雲をちとる方ニッ 洞

杖を枕よ麓の草の露 江山

稲毒にぬし社拜すれて 蕉

撥しぬけ方の汗を流る 英

花紙よそと紙のふたは白 白

雨ふ肥なる峯のそとに 香

麦飯よ雲すくくをねん 雪

されたる意よ花の音す。山
 その一夫の幽よえづ松の枝 香
 出よとささる人舟のゆり 官江
 及心のうへて悲しん花四葉 一龍
 追つれて麻の子と捨てし 蕉
 中の秋暖流ある竹枝伐り 雪
 三線ちうく萩と踏おる 香
 うと人を思ふに浅る方お 白
 大勢あつておふたりね女 香
 一条や二条はうりけお袖うり 洞
 雲のうきさこれ比叡の山風 白
 こころしと雲ふふれこころ 江
 蒲原の風あつて帰る野道 雪
 酔ひぬけ伯父の面をえんをて 香

旅の味を子紙着ふ来る 龍
 機をひききふ小糸の香と焚て 蕉
 うれ夏うさうさ人の初ま 白

俳諧集

芭蕉

まゝ髪ぬく花の下やけりす
 入目試とくは西窓の力 之道
 あま塩の綱をさる秋の末に 珎碩
 菊をさくたうかつしそれ 蕉
 何風ふ牛の矢のめしと 道
 麦のふらふけたりくそをて 碩
 舞まで一ひきとる縄をた 蕉
 願はるる急聲の 旅 道
 とい獄の事とくは服とて 碩
 えいそ銀の出る卍屋と 蕉

山ふ事の時めりう幼氣道
かふと谷より踊鶴をり碩
力新よ実の芽毛紙進うけて蕉
細もさつとも喘とつうに道
このふとも布子^{イニ}重たき風に碩
すとも弥生のおれ貸たき道
時く小蛇もほさうぬ新畠道
昼柔らうしてを雀とて碩

合款の本の葉こしむと足ぬけ
草の戸を志れや積葉に庵は
相の本よ鶴鳴なる堀のうら
おろろ松ともえは新力叔
土芳

笠田

病丁のねをん落て揺ねふ
延雪の屋ハ小海をにや
時あや田のたけ様のさむね
木枯か頼とれいむ人の心
智月亭

おののたのさけしや志賀川雪
幼雪のさむさうやまゆらぎ
幻住庵のさむさう
乾放のさむさうがたき新
其角
は木戸や鏡のされてる新

猿義
きりねも削いつらひぬ新
去来

一吹風の木の葉を山に吹く 芭蕉
照引の胡弓の傍に川越て 凡北
にぬき紙怖と藤張のろ 央邦
はつたはさき運うる有れ力 蕉
人うもれとろふおの来 来
書ふらるる書信おろし秋れて 邦
とれとろしとろしとろしとれ 北
何事とろしとろしとろしとろ 来
里とろしとろしとろしとろ 蕉
はにとろしとろしとろしとろ 北
葉書の花のろしとろしとろ 邦
ぬあはらぬとろしとろしとろ 蕉
三葉のろしとろしとろしとろ 来
けとろしとろしとろしとろ 邦
けとろしとろしとろしとろ 邦

さうとろしとろしとろしとろ 北
若ふらとろしとろしとろしとろ 蕉
いとうとろしとろしとろしとろ 来
いとうとろしとろしとろしとろ 北
雪とろしとろしとろしとろしとろ 邦
火とろしとろしとろしとろしとろ 来
はとろしとろしとろしとろしとろ 蕉
瘦骨のろしとろしとろしとろしとろ 邦
隣とろしとろしとろしとろしとろ 非
うとろしとろしとろしとろしとろ 蕉
いとうとろしとろしとろしとろしとろ 来
せとろしとろしとろしとろしとろ 北
たとろしとろしとろしとろしとろ 邦
青天とろしとろしとろしとろしとろ 来

このたゞは、
肩ふたぬる、
残る雪男に、
放てたの、
葬礼ふた、
女、
後朝の、
脊中、
志、
子、
預、
ふ、
七、
家、

ありと名條のあとくろ
 有叻の飼ぢく鵬又餌とくせ
 米はくらさる青山の秋
 りかろひの猪を破るあせ
 瓶子と係へく出と白糸
 杖つとてのはれ坊ろれ
 空あつてかよはとめ急
 まぬきて猿に小唄かおせ
 雲や庵の屏風は昼く鹿
 面うけはあかきたる唐
 おまゐのうろり香風は
 うろりとたつまをのろ
 ひくろり雀義くてゆく
 紫雲の市けつろり酒買
 市

明日の鐘鼓の音も聴たり之
いふ毒も海槽からふ浪も村
あふけさやそおの級百
ふとあつてつるあひあつて焦
ちとけあまううんちる棟札之
持衣は下衣の烏帽子は傾し額
幕成志はれい皆けしとる焦
雞のうたふもこれの面あれや之
細うの泣もあつる陽を市
おまの射場やうんとう挽て百
蛇ははちるすこれ一ふと村
物の親

上柳垂して

色蕉

は日ハ非成なふと一とこれ

九十九

をよ土民の供物納むる示石
水える芦のぬけりう雁鳴し凡兆
園はねるうる表楫の声去来
ふやうとふもふ力の教人景桃
秋は突おる虫食の杖乙州
實入よとそ足放の早稲の赤と史邦
里近くふる馬の足蹟玄哉
押して大ふれう多う録石
奉加ふ出る僧の首途蕉
あつ川や扉屋の土とふしおと来
ふもたふし荆咲くう北
泥濯ふやとれ歩りけう業州
猫のいふみの声も恨めし桃
上いふ下いふもとそあひ焦

